

エンパワーメントと洗脳

～ホメオスタシスのフィードバック関係を用いた
洗脳によるエンパワーメントを分析するための
フレームワークの構築～

宮 脇 秀 貴

I はじめに

筆者が大学院生の時、あるメーカーの工場へ調査に行ったことがあった。そのメーカーは業界でも大手であったため、工場見学用のツアーパッケージが用意されており、担当者が慣れた感じで案内と説明をしてくれた。ただ、少し違和感があったのは、担当者だけでなく、会社や業務内容の説明のためにスクリーンに出てくる人、そして、インタビューした現場の人まで、全員が同じような台詞を話していたことであった。特に、仕事のやりがいや仕事への想いに対して、自社の経営理念や社是、行動方針などを交えて熱心に答えている彼らの姿は、また同じ人が出てきたのかと目を疑うほどであり、よく言えば、十分に教育されているという印象を受けた。筆者だけでなく、この違和感を同行していた友人も感じていたようで、一言、「恐い」と漏らしていたのを今でも鮮明に覚えている。

エンパワーメントとは、組織の中で、市場に近い現場の組織成員に権限を委譲し、彼らの創造性や自発性、自律性を促進することで組織の活性化を行うものである。宮脇（2009）では、エンパワーする側の企業や経営者、管理者がどのように組織成員の考えや行動に影響を与えるかという点に関して、人に影響を与えることを善い方向から解釈して、組織成員の無意識に働きかけ、記憶を操作し、新しい思考パターンである物語を脳内に作り出して、組織成員の思考

や行動に影響を与えるプロセスを考察した。しかし、逆の方向から解釈すると、これは、企業や経営者、管理者による洗脳につながると考えることもできるのである。つまり、エンパワーメントを、ボトムアップによる組織活性化の考え方やプロセスであると限定してしまうのではなく、トップダウンによる組織コントロールの考え方やプロセスとして検討する余地は大いにあると考えられるのである。

本稿では、トップダウンコントロールのためのエンパワーメントのあり方、すなわち、洗脳によるエンパワーメントのメカニズムを最新の脳科学の視点から考察し、洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを構築していく。また、そのフレームワークの枠組みの中での会計情報の意義や役割なども考察していきたい。なぜなら、エンパワーメントのハードな側面⁽¹⁾や組織文化などを組織成員の環境であると捉えると、Harris (1998) が述べたように、人の思考や記憶、行動は、程度や深度の差はあるものの社会環境から影響を受けており (p. 153, 訳 p. 193)、組織成員が影響を受けるプロセスやコントロールされる仕組みを解明することは、見せかけのエンパワーメントではなく、真のエンパワーメントが機能する仕組みの解明につながると考えているからである。今回は、最新の脳科学をもとにした洗脳の視点から、エンパワーメントによる組織成員の教化・改造プロセスを考えてみることにする。

以下では、まず、従来、ボトムアップを推進するために用いられてきたエンパワーメントを、トップダウンコントロールに援用する可能性を検討する。トップダウンコントロールとボトムアップは対の概念であり、エンパワーメントとトップダウンコントロールは、本来、概念的には融合しないと考えられるが、エンパワーメントの前提である企業や経営者などが示す大きな方針やベク

(1) エンパワーメントのハードな側面とは、エンパワーメントの外側の中のある側面を表したものである。エンパワーメントを球状に表すと、内面と外面に区分でき、さらに外面は、ハードな側面とソフトな側面から構成されている。このハードな側面とは、組織成員をエンパワーし、自発的・自律的に行動させる環境のことであり、例えば、フラットな組織階層で権限を現場に委譲することや、自発的な活動を促すエンパワーメント型の会計情報を整備することなどである。詳しくは、宮脇 (2008, 2009) を参照せよ。

トルという部分に焦点を当てることで、トップダウンコントロールのためにエンパワーメントが利用できることを導いていく。次に、洗脳に関する主要な先行研究をレビューし、これまで洗脳がどのように捉えられてきたのか、また、そのメカニズムがどのようなものなのかを示していく。続いて、これまでの洗脳に関する研究を、最新の脳科学の視点から捉え直し、洗脳の定義を明確にする。そして、苫米地（2000）と Taylor（2004）の研究をもとにして、最新の脳科学の視点から、洗脳の目的や方法、洗脳のメカニズムなどを明らかにしていく。最後に、ホメオスタシスのフィードバック関係の理論を用いて、洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを構築し、そのフレームワーク内での会計情報の意義や役割などを考察することにする。

Ⅱ トップダウンコントロールのためのエンパワーメント

本節では、現場の組織成員の創造性や自発性、自律性を促すエンパワーメントが、本来の趣旨とは全く反対のトップダウンコントロールを助長する考え方・経営手法となり得るかに関して検討していきたい。なぜなら、組織が示す方向性やベクトルの影響が現場の組織成員の自律性を凌駕するほどに強い場合に、エンパワーメントがどのような機能を果たすかを考察することは、エンパワーメントを促進させる真の要因を捉えるために必要であると考えたからである。

以下では、まず、管理会計研究の中でエンパワーメントが提唱された背景を簡単に述べ、次に、組織が示す方向性やベクトルの影響と現場の組織成員の自律性の度合いの関係から、トップダウンコントロールの手先として、エンパワーメントが用いられる可能性を探ってみたい。

1. エンパワーメントと現場の自律性

そもそも管理会計研究の中では、エンパワーメントは、「会計情報」によるトップダウンコントロールの行き過ぎ、あるいは不適応化のアンチテーゼとして Johnson（1992）によって提唱されたものである。彼は、現場の活動をマネ

ジメントするには、会計情報による管理ではなく、非財務情報にも目を向け、現場に権限を委譲し、現場が主体となって自律性や創造性を持って行動できるように促すボトムアップエンパワーメントが必要だと主張した。

一般的に、エンパワーメントでは、経営理念や行動方針などの組織の方向性を示す大きいベクトルに沿って、組織成員の創造性や自発性、自律性を促そうとしている。重要なことは、あくまでも組織の大きいベクトルの中で、ボトムアップエンパワーメントを実現し、現場をエンパワーしようとしていることである。つまり、当然のことではあるが、現場の組織成員の自律性は、その企業や経営者などが示す枠の中でのみ、奨励されているのである。

2. 組織が示す方向性やベクトルと現場の自律性のバランス関係

組織や経営者、管理者などが示す大きいベクトルや方向性が、現場の自発性や自律性を促進する度合いよりも強くなった場合に、果たしてエンパワーメントは、ボトムアップエンパワーメントとなり得るのだろうか。あるいは、現場の創造性や自発性、自律性を促すはずのエンパワーメントは、トップダウンコントロールを助長するものに代わってしまうのだろうか。組織の方向性・ベクトルと現場の自律性の影響力の関係を表すと、右記の表1のようになる。

表の縦軸には、「組織の方向性・ベクトル」と「現場の自律性」の影響力の強弱を不等号で表し、横軸には、エンパワーメントの種類と備考欄を設けている。

まず、「現場の自律性」が「組織の方向性・ベクトル」の影響力よりも強い場合には、エンパワーメントにはならず、ただの身勝手な集団の集まりとなる(表1の①)。なぜなら、企業としての統制が取れておらず、現場の自律性が、企業の理念やベクトルからはみ出しており、全く意志統一のない状態になるからである。この場合には、トップダウンコントロールを強め、現場の自律性を弱めることで、バランスが取れるようになると考えられる。最終的には、これらのバランスの良い状態であるバランスの取れたエンパワーメントへ向かうことになる(表1の②)。

(表1) 組織の方向性・ベクトルと現場の自律性の影響力の関係から考えられるエンパワーメントの種類

組織の方向性・ベクトルと現場の自律性の影響力関係	エンパワーメントの種類	備考
「組織の方向性・ベクトル」 ∧ 「現場の自律性」	①現場が企業の方向性を考えずに行動する（エンパワーメントにはならない）	企業としての統制が取れておらず、現場の自律性が、企業の理念やベクトルからはみ出している。
「組織の方向性・ベクトル」 ∥ 「現場の自律性」	②バランスの取れたエンパワーメント	組織の方向性・ベクトルに沿って、組織を活性化させるために行われるエンパワーメントである。
「組織の方向性・ベクトル」 ∨ 「現場の自律性」	③現場の自律性を強化するエンパワーメント	組織の方向性やベクトルの影響力を弱め、エンパワーメントを強化しようとするもので、②の状態のエンパワーメントを目指している状態である。
	④組織の方向性・ベクトルへ従わせようとするエンパワーメント	本来は、組織の方向性やベクトルの影響力を弱め、②へ向けてエンパワーメントを強化していくはずが、逆に、トップダウンコントロールを強化するためにエンパワーメントを用いている状態である。

次に、「現場の自律性」と「組織の方向性・ベクトル」のバランスが良い場合、すなわち、「組織の方向性・ベクトル」の影響力と「現場の自律性」の度合いや程度がほぼ均衡した状態の場合には、エンパワーメントは、現場の自律性を促し、組織成員の創造性や自発性などを引き出すものとなる（表1の②）。

最後に、上述のエンパワーメントにならない場合（表1の①）とは逆に、「組織の方向性・ベクトル」の影響力が「現場の自律性」よりも強い場合には、エンパワーメントは、次の2つの種類に分かれることとなる。1つ目は、現場の自律性を強化するエンパワーメントであり、組織の方向性やベクトルの力を弱め、エンパワーメントを強化しようとするものである（表1の③）。2つ目は、組織の方向性・ベクトルへ従わせようとするエンパワーメントであり、本来は、③のように、組織の方向性やベクトルの影響力を弱めエンパワーメントを

強化していくはずが、反対に、組織の方向性やベクトルを強化するためのトップダウンコントロールを助長するエンパワーメントとなるものである（表1の④）。なぜなら、組織の方向性やベクトルの影響力があまりにも強すぎると、権限を委譲し、自発性と創造性を促す仕組みを備えたエンパワーメントをどんなに行っても、すなわち、組織として組織成員の自律性を促進させようとしているように外からは見えていても、実際には、現場の自律性の範囲は殆どなく、現場の組織成員が自律的から他律的に行動せざるを得なくなるからである。形式上は現場の組織成員に自律性を与えているように見せながら、実質的には経営者や管理者のコントロールを強化することになるのである。もはやこのようなエンパワーメントは、見かけ上は現場の自律性を促すものであっても、実際は、組織や経営者などが示す方向へ現場を強引に導く鎖となり、トップダウンコントロールの一翼を担うようになってしまうと考えられるのである。

3. トップダウンコントロールのためのエンパワーメントとは

上記1.と2.の検討からも、エンパワーメントには、組織の方向性やベクトルを強化するためのトップダウンコントロールを助長し得る余地が十分にあると考えられる。一見、矛盾する言葉の並びではあるが、「組織の方向性・ベクトル」の影響力が「現場の自律性」を凌駕してしまうと、もはやエンパワーメントは、見かけ上は、現場の自律性や自発性、創造性を高めるように機能していながらも、実際は、現場の他律性や受動性、模倣性を高めることになり、組織成員に対するコントロールを強化するものに代わるのである⁽³⁾。つまり、エンパワーメントがトップダウンコントロールを補完してしまうのである。

以上のように、経営者や管理者が示す経営理念や行動方針などの組織の大きなベクトルの影響が、現場の自律性を促す度合いや程度よりも遥かに強くなった場合には、エンパワーメントは、従来の現場の自律性を促すものからトップ

(2) このようなエンパワーメントを、「見せかけのエンパワーメント(pseudo-empowerment)」と呼ぶことにする。

(3) ボトムアップのエンパワーメントとトップダウンを補完するエンパワーメントを、コインの表裏のような関係と考えているため、「代わる」という表現を用いている。

ダウンコントロールを補完する考え方・経営手法に代わってしまうのである。

これまでの検討を踏まえて、以下では、エンパワーメントをトップダウンコントロールの手段に変換させる触媒的なものとして、「洗脳」を取りあげ、その仕組みや機能を考察していきたい。なぜなら、洗脳によるコントロールと、エンパワーされながらも、実はコントロールされているという状態のメカニズムは非常に似通っているからである。洗脳では、被洗脳者は、自分は自由で、自分で考えて意志決定を行い、行動していると思っているが、実は、洗脳者が被洗脳者に気づかれないように、被洗脳者の思考の仕方や信念⁽⁴⁾などを変えてしまっているのである。これは、企業や経営者などがエンパワーメントを謳いつつ、経営理念や行動方針などの影響力を強め、しかも組織成員が知らない間にトップダウンコントロールを浸透させているプロセスと同じ仕組みなのである。したがって、見せかけのエンパワーメントの仕組みを解明するために、エンパワーメントをトップダウンコントロール用の考え方や手段に変換する触媒として「洗脳」を検討することの意義は、非常に大きいと考えることができるのである。

次節では、洗脳とは何かについて、その定義や方法、メカニズムなどを探っていくことにする。

Ⅲ 洗脳による認知の風土の書き換えプロセス

本節では、洗脳に関する主要な研究をレビューしながら、これまでの洗脳に関する研究が曖昧にしてきたことや問題点を浮き彫りにし、最新の脳科学の視点から、洗脳の定義づけを行っていくことにする。なぜなら、そもそも洗脳がどのようなものかをはっきりさせなければ、洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを構築できないからである。

以下では、まず、洗脳に関する主要な先行研究である、Hunter(1951, 1956)、Schein 他 (1961)、Lifton (1961)、Hassan (1988) および西田 (1995) の研究を、主に洗脳の捉え方とメカニズムに焦点を当ててレビューしていくことにする。

(4) 本稿では、信念とは、何かについて私たちが思い出したり、真実であると考えたりすることとしておく (Zaltman 2003, p. 199, 訳 p. 235)。

次に、レビューの結果から、これまでの洗脳に関する研究の曖昧な点と問題点を整理し、最新の脳科学の視点から、本稿で用いる洗脳を定義づけし、次節で検討する洗脳のメカニズムの手がかりを見つけていくことにする。

1. 先行研究のレビュー

ここでは、本稿に必要な限りで、現代の最新の脳科学の視点から洗脳を捉えるまでの、洗脳に関する主要な研究である Hunter (1951, 1956), Schein 他 (1961), Lifton (1961), Hassan (1988) および西田 (1995) の研究をレビューしながら、従来の洗脳の捉え方や問題点などを明らかにしていく。以下では、Hunter (1951, 1956) から時系列に各研究をレビューしていくことにする。

(1) Hunter (1951, 1956)

Hunter (1951) は、“*Brain-washing in Red China*” で、インタビュー調査をもとに、中国共産党がどのように人々を洗脳しているかを明らかにしようとした。インタビューの調査対象は、中国共産党が進めていた洗脳を受けたばかりの革命大学を卒業して逃亡してきた中国人であり、香港でインタビュー調査が行われた。Hunter によれば、そもそも、「洗脳」という言葉は、中国の一般市民が、中国共産党の行っている思想改造や自己批判討論会などに対して付けた言葉であり、それが英訳されて“*Brainwashing*”と表されるようになったのである (p. 4, 訳 p. 5)。洗脳は、中国共産党が人民支配のために行っていた基本的な活動であり、中国本土の何千という人々が、子供から大人まで、学生から教授、公務員から犯罪者まで、洗脳されていたのである (p. 4, 訳 p. 5)。

Hunter (1951) は、インタビュー調査から、思想改造のために行われていたのは、洗脳 (Brain-washing) と変脳 (Brain-changing) であると述べている (p. 10, 訳 p. 13)。洗脳とは、思想の教化であり、比較的単純なプロセスであるが、変脳は、測定不能な、より邪悪で複雑なものであるとしている。なぜなら、変脳では、ある人の人生のある期間の特定の記憶が、何も起こっていなかったかのように消されるだけでなく、記憶のこのようなギャップを埋めるために、権

力者がその人に覚えさせようとしていることを脳に入れ込むからである。変脳では、催眠術や薬とともに、肉体的苦痛につながるが身体的暴力を必ずしも必要としない、例えば、偽罪を適用して仲間から隔離し、嘘で感情を揺さぶり、自白に追い込むというような「巧みなプレッシャー」を用いて、人の精神を歪め、批判力を破壊し、良心を麻痺させていたのである (pp. 10-11, 訳 p. 13)。

その後、Hunter (1956) は、中国共産党の洗脳を受けた人々に対するインタビュー調査を重ねた結果から、洗脳を政治的戦略として捉え、人々をコントロールするプロセスと改造するための教化・説得プロセスに分けて考えるようになった (p. 199)。また、この2つのプロセスでは、例えば、脅しや暴力、催眠術、薬などを用いて、最終的に自白をさせることが必要不可欠な要素となっており、自白によって思想の生まれ変わりを促すようにしていたのである (pp. 204-242)。

以上の Hunter (1951, 1956) の研究から分かることは、次の3点である。

- ・洗脳と変脳の2種類があり、思想教化と思想の入れ替えを別に捉えている。
- ・変脳では、催眠術や薬だけでなく身体的暴力を伴わない巧みなプレッシャーが用いられている。
- ・最終的に自白をさせることが必要不可欠な要素となっている。

(2) Schein 他 (1961)⁽⁵⁾

Schein 他は、1950年から1956年の間に中国共産党の捕虜(囚人)となっていたアメリカ人にインタビューし、彼らの体験を分析した。その結果、捕虜(囚人)となっていたアメリカ人の殆ど全ての人々が政治・思想的にダメージを負うような自白を強要されているが、ほんの数%の人のみが共産主義者に変っただけであったことを発見した (p. 15)。

(5) 次の Lifton も 1961 年の研究なので、アルファベット順であれば Lifton の方を先に並べるべきであるが、研究の調査期間が Schein 他の方が早いので、Lifton を後にした。

Schein 他は、捕虜（囚人）に対して行われていたことは、逃げられない環境で、普通では考えられない激しさの長期的な説得が行われていたのであり、威圧的に説得されたと考え、威圧的説得が行われていたとした（pp. 18-19）。したがって、Schein 他は、捕虜（囚人）たちの信念や態度・行動、価値観などは、威圧的手段によって、一時的に劇的に変えられたのであり、この手段を、人間の心に永続的な影響を与える新しく強力な武器として「洗脳」と呼ぶ必要はなく、威圧的説得として捉える方がよいと考えたのである（p. 15）⁽⁶⁾。

この威圧的説得は、解冻、変革および再凍結という3つの連続する手続きを段階的に経ることで行われる（pp. 119-139）。この威圧的説得の目的は、捕虜（囚人）自身や共産主義に関する捕虜（囚人）の信念や態度・行動に変化をもたらすことであり、そのための主要な要素として、罪の意識にもとづく心からの自白が用いられていた（p. 120）。

①解冻のステージ

人格に作用している支配力の影響という手段を用いて人格の修正ないし改造が行われる。これは、既存の考え方や価値観などに関する平衡（バランス）がもはや安定しないようにさせることであり、変化への必要性や動機を引き起こすための誘導である。つまり、いくつかの信念に対して解冻された人は、変化を望むようになったり、既存の信念を捨てようとしたりするのである。具体的な方法としては、少量で普段食べないような食事を与える、継続的な尋問や独房仲間からの圧力による睡眠不足、食事から来る赤痢などの病気、運動不足、薄着で極寒に置かれる、長時間にわたる起立姿勢やスクワットによる身体的苦痛、手錠や鎖による身体的苦痛や怪我、取調官や独房仲間からの暴行などが行われ（p. 125）、信念や考え方などの解冻が始まるのである。

(6) Schein 他（1961）は、威圧的説得とその他の影響力の行使の違いを、解冻のプロセスのような状況で、人が身体的・精神的に制限されている度合いの違いであると述べており、この違いの本質は、解冻プロセスの激しさに関連するとしている（p. 139）。なお、解冻プロセスの説明は、本文70ページを参照のこと。

②変革のステージ

捕虜（囚人）を、新しい信念、態度、価値観および行動様式に至らせる精神操作のステージである（p. 136）。情報、議論、模倣された、あるいは認められたモデルなどの影響という手段を用いて、新しい精神を形成していく。このステージでは、捕虜（囚人）は、新しい平衡（バランス）に向けての変化を示し、通常は、人に、新しい何かを学ばせたり、古い何かを再定義させたり、あるいは自分の性格や信念などを再評価・再統合させたりする。これは、光が見えた、洞察力が備わった、他の人の視点にもたくさんあるのメリットがあることが分かった、あるいは他の人が物事をどのように考えるかが分かり始めたなどの体験であり、これらがきっかけで信念や考え方などの変革が引き起こされるのである。

③再凍結のステージ

変化に対する報酬や社会的支援によって、新しい平衡（バランス）を、自分の性格や現在の対人関係に再統合することが促進される。これにより、他の人が新しい視点を共有していることや変化を喜んでいること、また、新しい信念が自己のイメージや信念と全く同一であると自分自身で発見できる経験をすることになる。

以上の Schein 他（1961）の研究から分かることは、次の3点である。

- ・ 永続的に人の信念、態度・行動および価値観などを変化させることを洗脳として捉え、そのような洗脳は行われていなかったとした。
- ・ 信念、態度・行動および価値観などの変化は、威圧的説得によって行われていた。
- ・ 威圧的説得には、解凍、変革および再凍結の3つのステージ（プロセス）があり、それらを段階的に経て、威圧的説得は行われる。

(3) Lifton (1961)

Lifton は、洗脳という言葉は、もともとは、中国の思想注入テクニックあるいは教化テクニックのことを指す言葉として中国の人々が用いた言葉であると捉えていた (p. 3, 訳 p. 3)。彼は、洗脳という言葉のイメージとして、他人の心を全面的に支配するための全能で、抗しがたい、しかも不可解な呪術的方法と見られるイメージが働いていることを述べ、洗脳という言葉が大まかに用いられているため、恐怖、憤懣、服従への衝動、失敗の弁明、無責任な非難および幅広い情動的な過激主義全体をひっくるめる好都合な表現の集合点になっていると指摘した (p. 4, 訳 p. 4)。

そこで Lifton は、中国共産党が行っていることを思想改造として捉えることにした。なぜなら、思想改造という言葉が世界中で注目されるようになったからである (p. 5, 訳 p. 5)。思想改造は、西欧人を第一義的な対象としたものではなく、世界の人口の4分の1を占める中国人自身に向けられたものであり、中国国内の革命大学、一般大学、諸学校、刑務所、企業、政府機関、労働組織および農民(業)組織などで激しく繰り広げられたことから、この目覚ましい展開ぶりと集中的に他人を感情的に揺り動かす力を持っていることに、西欧諸国の人々は大いに関心を持ったのである。

この思想改造には2つの基本的な要素があり、それらは、自白と再教育である (p. 5, 訳 p. 5)。自白は、自らの過去および現在の悪を曝け出し、それを放棄することであり、再教育は、ある人間を共産主義者のイメージに造り変えることである。(7) この2つの要素は、各々の要素で、社会的統制や個人の変革を狙った、一連の知的、情動的および身体的圧力や訴えかけを利用していることから、密接に関連し合っている。

Lifton は、1953年から1955年にかけて、中国共産党の思想改造に関する研究調査を行っている。彼は、韓国で行われた捕虜交換で戻ってきた兵士たちの医学判定に立ち会い、その兵士たちと共にアメリカへ帰る船の中で情報を収集

(7) 人格を「つくり」変える場合に用いる漢字としては、訳文や「改造」という言葉からも、「造る(つくる)」という漢字を用いることにする。

し、その後、捕虜収容所で思想改造された西欧の民間人 25 名と中国国内の一般大学や革命大学で思想改造を受けた中国人のインテリの人々 15 名に、香港で面接調査を行い、思想改造の共通パターンを見出した (p. 6, 165, pp. 8-9, 訳 p. 6, 71, pp. 8-9)。

その共通パターンとは、囚人は全員、死と再生の苦悶劇に参加させられるということである (p. 66, 訳 p. 72)。この苦悶劇とは、刑務所に入ってきた反動的スパイはいったん滅びてしまい、その代わりに、共産党式に復活した新しい人間が出現しなければならないというプロセスである。誰もこのドラマを演じたいわけではなかったが、囚人は参加を強いられ、取調官や独房仲間などの周りの力に引き込まれる中で、自白と改造の必要性を自ら感じ始めるまで圧力がかけられるのである。このような環境に適合するために囚人に与えられている選択肢はごく限られたものであり、囚人が選ばざるを得ない選択肢とは、身体的かつ感情的な攻撃によって囚人に象徴的な死がもたらされるとともに、取調官の寛容な態度と囚人の自白が象徴的な死と再生の間の橋渡し役を果たし、最終的な自白と再教育課程によって再体験が作り上げられ、思想が改造されていくというプロセスである。この思想改造のプロセスは、次の 12 のステップからなる (pp. 67-85, 訳 pp. 73-93)。

①アイデンティティに加えられる攻撃

まず、これまで自分が考えてきた自分自身というものは、単なる仮面に過ぎず、その裏に自分の正体が隠されていると、身体的および感情的に攻撃される。そうしていくうちに、自分が誰で、自分が何者であるかについてのつながりを失い始め、また、仲間とどのような関係にあるのかという位置づけも失い始めるようになり、やがて自我が崩壊する。こうした攻撃の中で、幼児ないし人間以下の動物に退行してしまい、眠るでもなく目覚めてもいない状態となり、自分よりもより強い成人あるいは調教師によって簡単に操作されるようになるのである。

②罪意識の成立

囚人は、四面楚歌の状況であることに気づき、有罪であるというメッセージを受け続けると、やがて無意識的だけでなく意識的にも罪悪感を感じるようになり、憤慨する気持ちはすぐに消えてしまうようになる。やはり処罰に値することをしたのではないのかという感情に移行するようになる。

③自己背信

友人や仲間を公然と非難するように求められる。なぜなら、他人への非難を行うことは、自分の罪悪感や恥辱感を増すだけでなく、自分の存在を形成していた周りの他人や組織、行動基準を放棄させられてしまうことになるからである。結局、裏切りを強要された対象は、自分の仲間や友人ではなく、自分自身の生命の核心なのである。

④忍耐（抵抗）の限度（全面的葛藤と基本的恐怖）

囚人は、自分を取り巻く環境に対して絶対的な行き詰まりを感じ、絶望と恐怖で一杯になる。同時に、自分たちの置かれている環境がどうにも動かしがたいものであり、変わらなければならないのは頑固な犯罪人、つまり、自分の方だと思ようになるのである。そうしていくうちに、自分自身が全滅させられるという思いが、外からの一切の脅迫や非難ではなく、内から湧き上がってくるようになる。

⑤寛容と機会

取り調べ側の態度が突然変化し、寛容な態度となる。囚人の忍耐力の限度にきた丁度その時に、予期しない親切な態度を取る。例えば、鎖と手錠がはずされ、睡眠の機会が与えられるなどのことである。この寛大さは、囚人を取り巻く環境が根本的に変わったり、その環境の持つ現実の基準が緩和されたりすることを意味するのではなく、むしろ、囚人たちに、その

環境が果たしている原則を吸収させるとともに、その原則に自らを十分適合させていけるように圧力を単に緩めるという意味だけであった。しかし、この寛大な処置は、囚人が自分自身で自己改造に取り組もうという大きな刺激となるのである。なぜなら、囚人にとって思い描ける世界が絶望ではなくなるからである。

⑥ 自白の強制

囚人たちは、寛大な処置が施される前に、自分たちが置かれている環境から、自白する者だけが生き延びることができることを読み取っていた。それは、暴行や寛大な処置などのあらゆる手段の中に醸し出されていた。このような状況下では、選択の余地はなく、自白の強制に従う他はなかった。

⑦ 罪の方向づけ

囚人は、自白脅迫が働き自白するようになると、その自白に合わせた表現を用いて、罪や悔恨を話すようになる。過去に行った行為の中から、個人的な罪悪や破壊行為の証を読み取って、ごく平凡だったことや寛大なことであると思っていたことも、犯罪とみなすようになるのである。

⑧ 再教育（論理的に名誉を汚す）

罪を認め、罪悪感を覚え、個々の犯罪行為を認めることだけでは十分でなくなり、囚人は、自己の良心の呵責を自己存在のあらゆる面に広げ、自分が行うことは、恥ずべき、邪悪な一連の行為とみなすように内面化をはからなければならなくなるのである。ここで言う恥ずべき邪悪な行為とは、共産主義に反する行為だけを意味するのではなく、この内面化によって、自分自身が大事にしてきた理想が崩されていくことも意味しているのである。そして、囚人は自己の内的誠実さに対して、より根深くより脅威的な罪悪感と恥辱感を体験するようになるのである。

⑨進歩と調和

囚人は、あらゆる問題が解決したという深い満足感を味わうようになる。この満足感とは、生きること、働くこと、および苦悩を共にすることなどで集団的な連帯感を体験し、改革運動の持つ道徳的正義を分有したという感情である。この段階では、人間であることの地位も回復し、囚人は取調官と親密なコミュニケーションを取るようになってくる。

⑩最終自白（自白の要約）

囚人は、自分が置かれている環境との調和と現実の雰囲気の中で、自分が何であり、また、自分が何であったかについて結論的な陳述に喜んで応じようとする。ここでの自白は、以前に述べた全ての自白の象徴的な表現となり、それらを要約したものとなる。

⑪再生

解放される直前、拘禁の終わりに、囚人は新しいアイデンティティと古いアイデンティティの統合をはかる。囚人のこれまでのアイデンティティは拘禁中に辱められたが、それは一時的な、部分的な死を通過しただけである。例えば、もともと医者や司祭であったのなら、中国共産主義に共鳴する医者や司祭になったのであり、自分の思考や行動を再解釈し、自分の価値観を書き換え、自分の現実感を記録し直すのである。以前は、攻撃的で全体主義的と考えられていた共産党の世界が、今や平和愛好的で、民主的に見えており、囚人は取調官側と同一化し、そのような信念の中にいることが幸福であると感じるようになってきているのである。

⑫解放（新しい環境への移り変わりと不確実な状態）

解放される前に、再度、検事側と弁護側が揃い、有罪判決と再生が型通りに行われ、囚人は、外部の聴衆がいる前で、もう一度犯罪を認め自分の新しいものの見方を表明する一方で、弁護士は、いっそう寛大な処置を嘆

願するという段取りを踏むことになる。もっと一般的なやり方としては、刑務所にいる間に、囚人に対して告発状と判決状が読まれるというものがある。

解放されることは、苦悩の終わりを意味するのではなく、むしろ、捕らえられていた間に苦労して造りあげてきた一切のものを直ちに問いただしてみろという環境に投げ込まれることになる。これは、監禁中に体験したこととまさに同様の、新たなアイデンティティの危機となるのである。最初のうちは、記憶の中に蘇ってくる、あの比較的単純で、それなりに秩序があり意味のあった刑務所体験に郷愁の念のようなものを感じることもあるが、新しい環境を信じていることができるようになり始めると、前述の郷愁の念のような感覚を捨てることができるようになるのである。

このように、全ての囚人は、解放された直後から、自己の誠実性、信頼性および純粋性に関して、強く疑惑を持つ体験をしなければならないのである。

また、Lifton は、思想改造の中で用いられている8つのコントロール要素を抽出している (pp. 420-435, 訳 pp. 438-453)。これらの8つの要素は、思想改造にとって相互に必要な不可欠な存在であり、8つの要素が結合すると、一時的な活気づけや陽気づけの雰囲気を作り出されるが、その雰囲気は、人間にとっては重大な脅威となるのである (p. 420, 訳 p. 438)。

①環境コントロール

これは、人間的コミュニケーションのコントロールのことである。例えば、人間が見、聞き、読み、書き、体験し、表現する一切の外界とのコミュニケーションだけでなく、自分自身とのコミュニケーションに対しても主導権を握ろうとすることである。

②神秘的操作

これは、環境の中から自然に発生したような方法で、人から特定の感情や行動を導き出そうとするものである。この神秘的操作では、特殊な神秘的な雰囲気そのものが、神秘的操作を正当化するだけでなく、強制させることになる。例えば、神秘的な雰囲気の中では、高尚な目的感、社会発展が進む中で今まさに起ころうとしているいくつかの原理を直接的に知覚しているという感覚、そして、その社会発展の中で自分が先陣を切っているという感覚を持つようになるとともに、神秘的な命令を実行するように、歴史、神および他の超自然的な力によって選ばれたという感覚も持つようになるのである。

③純粋性の要求

思想、感情および行動を、善なるものや純粋なものとそれら以外のものというように両極に分けることによって、中国共産党の思想などに合わないものを、悪しきもの・不純なものとして取り扱い、不純な状態を導く汚れや毒を探し出し排除することを要求するものである。ここでは、罪意識と恥意識が高く評価され、それらを追い出すことができれば高い評価を得られるが、できない場合には、屈辱と追放を受けることになる。思想改造では、絶対的な純粋性（良き共産主義者）は達成可能であり、この純粋性の名の下に誰かに向けてなされた行為はどんなものであれ、それは究極的・実践的には道徳的であるという判断となる。

④自白の儀式

純粋になることによって、囚人は、自分自身に対して自白を強要する強迫観念に駆られるようになる。思想改造では、普通の宗教的、法律のおよび治療的表現の域を超えて、信仰そのものになりきるまで自白が推し進められる。自分の犯してもない罪を白状し、人工的に誘導された罪を、恣意的に課せられた治療に名を借りて、自白することが要求されるのである。

自白は、ある種の個人的浄化のための乗り物であり、絶えず、内面を空にしておくことや不純なものを心理的に追放するための手段となっている。そして、自白は、抑圧された罪悪感を救うための機会を絶えず提供していることから、人に心理的満足を与えるだけでなく、自白仲間との狂騒的な一体感やこの上なく激しい親密感などを作り出すのである。

⑤聖なる科学

基本的に教義は、聖なる雰囲気を持ち、人間の存在を秩序づけるための究極的な道徳ビジョンとして示されている。この神聖性により、教義は、基本的な仮定に疑問を抱くことを禁止し、尊敬の念を強要してくるのである。このような普通の論理関係を超越するようなことをしておきながら、絶対的な科学的正確性が誇張され主張されるのである。

このように、究極的な道徳的ビジョンが、究極的な科学となり、それを敢えて批判する人間や心の中でそのように思っている人間は、非道徳で不遜であるだけでなく、非科学的とされてしまうのである。

⑥特殊用語の埋め込み

思想改造では、簡潔的な決まり文句が用いられる。最も広範囲で複雑な人間問題が、短く、極めて還元的な、決定的な響きのする、しかも容易に記憶され、表現される言葉に圧縮されるのである。これらは、例えば、思想改造を行う側にとって、個人の要求や別の思想の探求などの、通常は厄介で解決するのに苦しむような問題を包括し、それらを批判的に片付けてしまうために用いられる。この言葉の持つ効果は締め付けであり、言語的な剥奪を受けることで、思考や感情能力は極度に狭められてしまうのである。

⑦人を超えた教義

人間よりも教義を最優先する考え方である。教義には、現実の人間の性

格ないし人間体験のいかなる側面よりも、究極的に遥かに確かな根拠のある、真実かつ現実的なものであるという仮定が存在しており、教義に対する絶対的な誠実さが人に対して要求されるのである。また、神話が聖なる科学（教義）と融合して出てきた論理は、極めて強要的・強制的なものとなり、論理が簡単に個人的体験の現実と置き代わってしまうのである。

⑧存在権の線引き

存在権を持つものと持たないものとの間に、明確な線を引く。世界は、人民とそれ以外に区別される。非人民は、思想改造を受け、自らの態度と個人的性格を変革することによってのみ、人民になることを許されるのである。

以上の Lifton (1961) の研究から分かることは、次の3点である。

- ・洗脳という言葉は定義が曖昧であるため、洗脳という言葉を使う代わりに、思想注入あるいは教化注入のプロセスを「思想改造」という言葉を用いて捉えている。
- ・思想改造の基本的なプロセスは、自白と再教育である。
- ・思想改造が行われるには、12のステップを段階的に経る必要があり、その中で8つの要素がコントロールされなければならない。

(4) Hassan (1988)

Hassan は、元統一教会の信者であり、自分の経験と Schein 他(1961)や Lifton (1961)の研究をもとにして、破壊的カルトでのマインドコントロールの実態を明らかにしようとした。

- (8) Hassan (1988) の言う破壊的カルトとは、非倫理的なマインドコントロールのテクニックを悪用して、メンバーの諸権利を犯し続けるグループのことであり、メンバーを集団にとどめておくために説得やその他の有害な影響力を用いるという点で、正常な社会集団あるいは宗教集団とは異なる団体のことである (p. 37, 訳 pp. 75-76)。

以下では、まず、Hassan による洗脳とマインドコントロールの違いを説明し、次に、Hassan のマインドコントロールの定義を明らかにする。そして、マインドコントロールの中で用いられるグループダイナミックス（集団力学）と催眠作用の効果を述べ、最後に、マインドコントロールの4つの構成要素と3つのステップを示していく。

①洗脳とマインドコントロールの違い

Hassan は、洗脳とマインドコントロールは別のものであり、洗脳とは、強制的なものの典型であると述べている（p. 55, 訳 p. 107）。洗脳では、被洗脳者は、初めに自分が敵の中にいることを知っており、また、誰が囚人で、誰が取調官かという、それぞれの役割ははっきり分けられており、囚人側には、絶対最小限の選択の自由しかなく、通常、ひどい虐待が伴い、拷問さえ行われる（p. 55, 訳 pp. 107-108）。つまり、Hassan は、洗脳を、「拷問による回心」というイメージを呼び起こすものと捉えているのである（p. 56, 訳 p. 109）。

一方、マインドコントロールは思想改造とも呼ばれ、洗脳よりももっと巧妙で洗練されていると Hassan は述べており、例えば、被害者は、実際のところ加害者のことを友人または仲間と思っているので、洗脳の場合よりもずっと防衛的でなくなることなどをあげている（p. 56, 訳 p. 109）。マインドコントロールでは、露骨な物理的虐待は、殆ど、あるいは全く伴わず、その代わりとして、催眠作用がグループダイナミックス（集団力学）と結合して、強力な教え込み効果を作り出し、被害者は、直接脅されるのではないが、騙され、操作されて、決められた通りの選択をしてしまうのである（p. 56, 訳 p. 109）。

以上のように、Hassan は、洗脳を身体的暴力が伴うものと捉え、マインドコントロールを身体的暴力は殆どなく、もっと巧妙で洗練されたものと捉えている。

②マインドコントロールの定義

Hassan は、マインドコントロールを、上記①で述べたような、身体的暴力

は殆ど伴わないが、洗脳よりももっと巧妙で洗練されているものとして捉えており、個人の人格を分裂させるシステムであると定義している (p. 54, 訳 p. 105)。ここで言う人格とは、信仰、行動、思考過程および感情などの諸要素から成り立っており、それらが一定の型を成しているものとされている。つまり、家族、教育、友人関係および最も重要なものである、その人自身の自由な選択によって形成されたその人本来の人格は、マインドコントロールの影響下では、別の人格に置き換えられ、多くの場合、凄まじい集団的圧力がなければ選り取らなかったような人格に置き換えられてしまうのである。

なお、Hassan は、マインドコントロールにも明瞭で好意的なものと巧妙で破壊的なものがあり、破壊的な結果をもたらすものをマインドコントロールという言葉を用いて説明しようとしている (p. 55, 訳 p. 106)。つまり、個人の意志決定を行う時の人格的統合性を壊そうとするシステムだけをマインドコントロールとしており、マインドコントロールの本質は、依存心と服従・従順さを助長し、自律と個性を失わせることであると述べている。

③マインドコントロールとグループダイナミックス (集団力学)

Hassan は、破壊的カルトが行っているマインドコントロールを、1つの社会的・集団的なプロセスとして捉えており、しばしば大勢のグループがそのプロセスに関わって、そのコントロールを強化する役割を果たしていると述べている (p. 54, 訳 pp. 105-106)。つまり、上記①や②で述べたように、マインドコントロールは、グループダイナミックス (集団力学) を用いて個人の意志決定プロセスに影響を与え、ある人を1つの集団的環境に浸すことで達成されるものなのである。ある集団的環境に放り込まれた人は、その環境でやっていくために、自分の古い人格を脱ぎ捨てて、そのグループが期待する新しい人格を身に付けなければならなくなり、以前の自分の人格を思い出させるような現実は一切排除され、グループの現実と置き換えられるのである。例えば、集団的環境に放り込まれた人は、初めのうちは、わざと役割を演技でやっても、ついには演技そのものが現実となり、しだいに全体主義的なイデオロギーを身に

付け、いったんそれが自分のものになってしまうと、それが以前の彼の信念体系に取って代わるようになるのである。

④マインドコントロールと催眠作用

洗脳だけでなくマインドコントロールにも催眠作用が用いられる。なぜ、催眠作用が用いられるかと言うと、催眠にかかった人々は、トランス状態に入るからであり、その状態は通常の意識の状態とは根本的に異なるものになるからである (p. 57, 訳 p. 110)。通常の意識では、注意は、五感を通して外側へ向けられるのに対して、トランスにおいては、注意は内側へ向けられ、人は内面で聞き、見、感じるようになる。Hassan によれば、自分たちは宗教だと主張する多くのカルトでよく行われている瞑想と呼ばれるものは、カルトのメンバーがトランス状態に入るプロセス以外の何ものでもなく、そのトランス状態の中で、メンバーは、カルトの教義にますます従いやすくなるような暗示を受けるようになるのである (p. 57, 訳 p. 110)。また、トランス状態は心地よいリラックスの体験であるため、人々は、できるだけ、度々またトランスに入りたいと思うようになるだけでなく、一番重要なこととして、トランス状態では、人々の批判的能力は減退してしまうのである (p. 57, 訳 p. 111)。

破壊的カルトは、トランス状態をメンバーに引き起こすために、長時間の教え込み集会を行っている (p. 57, 訳 p. 111)。そこでは、非常にトランスを誘発しやすい、「反復」と「強制的に注意を集中させること」の2つが行われ、集会参加者は、のろのろと瞬きをし、考えることを止め、表情は弛んで、ぼかんとした、どうでもいいという状態になってしまうのである。このようなトランス状態の中にいる人々は、破廉恥な指導者によって、非合理的な信念を簡単に植え付けられてしまうのである。

⑤マインドコントロールの4つの構成要素と3つのステップ

まず、Hassan は、マインドコントロールを構成する4つの要素を説明している。

・行動コントロール (pp. 60-61, 訳 pp. 116-117)

個々人の身体的世界のコントロールである。仕事、儀礼、その他、人が行う行為をコントロールするとともに、例えば、どこに住むのか、どんな衣類を着るのか、何を食べるのか、どのくらい眠るのかなど、その人の環境のコントロールも含むものである。例えば、大部分のカルトがメンバーに対して、非常に厳格なスケジュールを定めるのは、この行動コントロールを行いたいからである。

・思想コントロール (pp. 61-63, 訳 pp. 118-121)

メンバーに徹底的な教え込みを行って、そのグループの教えと新しい言語体系を身に付けさせるとともに、自分の心を集中した状態に保つための思考停止の技術を使えるようにさせるものである。良いメンバーであるためには、その人は、自己自身の思考過程まで操作することを学ばなければならないのである。破壊的カルトでは、メンバーは、グループに批判的な情報を何でも閉め出すように訓練されている (p. 62, 訳 p. 119)。人が持つ典型的な防衛機構を歪めて、新しいカルトの人格を以前の古い人格から防衛するのである。この思考停止の技術とは、例えば、集中的な祈り、大声あるいは小声での唱えごと、および瞑想などを行って、悪い考えを心から追い出してしまうことであり、自分の現実を脅かすものは、何でも閉め出すのである (pp. 62-63, 訳 p. 120)。

このような思想コントロールにより、グループの教義と一致しないあらゆる感情を効果的に遮断することができるようになり、カルトのメンバーを従順な奴隷として働き続けさせることができるのである (p. 63, 訳 p. 121)。Hassan は、思想がコントロールされれば、感情と行動もまたコントロールされると述べている。

・感情コントロール (pp. 63-65, 訳 pp. 121-124)

人の感情の幅を、巧みな操作で狭くしようとするものである。人々をコ

ントロールしておくのに必要な道具は、罪責感と恐怖感である。中でも、罪責感は、集団への順応と追従を作り出すための、単独で一番重要な感情的手段である。罪責感により、メンバーはいつも、自己自身を責めるように条件づけられているので、リーダーが彼らの欠点を指摘しても、感謝の気持ちで反応してしまうのである (p. 63, 訳 p. 122)。また、恐怖感は、カルトのメンバーを結束させるために使われるものであり、その人を迫害する外部の敵を作り出すだけでなく、リーダーに見つかり懲罰されるという恐怖感をも生み出すのである (p. 63, 訳 p. 122)。

Hassan は、感情コントロールの一番強力な技術として、恐怖症の教え込みをあげている (pp. 64-65, 訳 p. 124)。カルトからの離脱を考えるだけで、人々は、発汗、激しい動悸および離脱の可能性を回避したいという強烈な欲求といったパニック反応を起こさずにいられなくなるのである。離脱すれば、暗黒の恐怖に襲われ、なす術もなく滅びる、つまり、発狂する、殺される、麻薬中毒になる、および自殺するなど教わるのである。

・情報コントロール (pp. 65-66, 訳 pp. 125-127)

情報は、私たちの精神を適切に働き続けさせるための燃料である。健全な判断を行うために必要な情報を拒まれたら、誰も健全な判断はできなくなる。人々が、カルトの罠に陥るのは、批判的情報に触れさせてもらえないだけでなく、マインドコントロールの結果、適切に働いて情報を処理するための内面的機構が欠けてしまうためである。このような情報コントロールは、劇的で圧倒的な力を持つのである。

以上のような、行動コントロール、思想コントロール、感情コントロール、および情報コントロールは、どのコントロールも人間の精神に対して大きな影響力を持っており、それらが合わさると、最も強固な精神の持ち主でさえ操作できる全体主義的な罠ができあがるのである (p. 66, 訳 p. 127)。

次に、Hassan は、Shein 他 (1961) が提示した強制的説得の「解凍、変革および再凍結」の3ステップは、強制的説得だけでなく非強制的なマインドコントロールに対してもあてはまるとしている (p. 67, 訳 p. 128)。上記(2)で説明したように、この3つのステップを段階的に経ることによって、マインドコントロールされた人間ができあがるのである。

以上の Hassan (1988) の研究から分かることは、次の2点である。

- ・洗脳は身体的暴力を伴うものであり、マインドコントロールは、殆ど身体的暴力は伴わず、グループダイナミクス (集団力学) の圧力と催眠作用によってトランス状態を作り出し、強力な教え込み効果によって、直接脅されるのではないが、騙され、操作されて、決められた通りの選択を人に行わせるものである。
- ・マインドコントロールには、行動コントロール、思想コントロール、感情コントロールおよび情報コントロールという4つのコントロール要素があり、また、解凍、変革および再凍結という3つのステップを段階的に経て、人はマインドコントロールされていく。

(5) 西田 (1995)

西田は、上記(1)から(4)までの研究をもとにして、基本的には Hassan (1988) の立場と同じように洗脳を捉えるだけでなく、情報処理の観点からマインドコントロールを分析している。

以下では、まず、西田による洗脳とマインドコントロールの違いを示し、次に、西田が示すマインドコントロールのプロセスを説明していく。

①洗脳とマインドコントロールの違い

西田は、まず、洗脳を、長時間、個人を拘禁状態において拷問したり、薬物を投与したりして、個人の精神構造を強制的に生理的に変化させるものと捉え

ている (pp. 51-52)。すなわち、洗脳とは、人が生理的な錯乱状況に陥るまで、外部から与える刺激をコントロールして、個人の反応を操作者の考えに沿わせようとするものである (p. 52)。

一方、マインドコントロールについては、Hassan (1988) と同じように、破壊的カルトと呼ばれる組織集団などが行う精神操作の技術に限定して用いる方がよいと述べており (p. 8)、通常、多くの破壊的カルトが用いるマインドコントロールの技術は洗脳に比べて、もっと洗練されていて、物理的にはっきりとした身体的拘束を用いていないことが多いとしている (p. 52)。そして、西田は、カムフラージュや納得させるといった心理的操作のテクニックがマインドコントロールであるとし (p. 21)、破壊的カルトのマインドコントロールとは、他者が自らの組織の目的成就のために、本人が他者から影響を受けていることを知覚しない間に、一時的あるいは永続的に、個人の精神過程 (認知・感情) や行動に影響を及ぼし操作すること、つまり、他者が個人の意志決定過程に微妙に影響を及ぼすことであるとしている (p. 57)。

②マインドコントロールのプロセス

西田は、人間の精神を情報処理システムとして捉え、人を、外界からの情報をインプットし、何らかの処理・加工を施し、アウトプットを出すシステムであると考えている (pp. 57-58)。したがって、人の意志決定過程とは、人が自分を取り囲む環境から情報を選択的に受け取り、その情報をどのように処理・加工して、どのように対応するのか、つまり、どういった行動を取るかを決定する過程となる (p. 58)。

西田によれば、人は意志決定の際に2つの情報を常に利用しており、それらをボトムアップ情報とトップダウン情報と呼んでいる (pp. 58-59)。ボトムアップ情報とは、情報処理時に、五感を通じて外界から取り入れる情報のことであ

(9) 西田 (1995) によれば、破壊的カルトとは、ごく一部の人の真の目的を、偽りと表向き目標のために集まった純粋な人々で装い、宗教、企業、共同体、結社および治療集団などと類される集団として組織されたものである (p. 14)。

り、意志決定中に、視覚、聴覚、嗅覚、味覚および皮膚感覚によって処理される情報のことを指している。一方、トップダウン情報とは、前もって獲得された記憶構造の中に貯蔵されている情報のことであり、意志決定中に処理される知識や信念を指している。これは、「ビリーフ」⁽¹⁰⁾と呼ばれている。

意志決定プロセスでは、人がどちらか一方の情報しか処理しないとは通常では考えにくいので、両者を照らし合わせて、ある判断や決定を下していると西田は考えた (p. 59)。つまり、個人が用いている2種類の情報を制すれば、個人の認知 (思考)、感情および行動を操作することも可能となるのである。したがって、マインドコントロールは、ボトムアップ情報をコントロールする方法、トップダウン情報をコントロールする方法、そしてこれらの両方をコントロールする方法となる。西田は、ボトムアップ情報をコントロールする方法を「一時的マインドコントロール」と呼び、トップダウン情報をコントロールする方法あるいは両方の情報をコントロールする方法を「永続的マインドコントロール」と呼んでいる。

一時的マインドコントロールは、個人の居る場に働く拘束力を利用している (pp. 59-60)。つまり、ある個人の置かれた特定の状況における判断や行動の操作を目的に、外部環境からの情報をコントロールするものである。一方の永続的マインドコントロールは、意志決定のための装置 (ビリーフ) までも操作してしまうので、個人の居る場に関係なく影響を与えることができるものである (p. 60)。

さらに、西田は、快あるいは不快な感情を喚起することが、人間の情報処理プロセスの論理性を歪めるとして (p. 71)、破壊的カルトは、ボトムアップとトップダウンの2つの情報のコントロールだけでなく、この2つの情報に影響を与える心 (マインド) の要素である感情のシステムをも、一定の方向へコン

(10) 西田 (1995) は、人のビリーフには、あまり頼りにならない主観的判断にもとづくものも多く、自分が正しいとするビリーフの全てが、専門家の行うような厳密な分析をして得られた結論であることは殆どないと述べている (p. 81)。また、人のビリーフシステムは、情報を満載した図書館のようなものであり、その中の一部のまとまりをスキーマとしている (p. 75)。

トロールしようとしていると述べている (p.60)。また、西田は、感情も情報提供によって生じるものであり、行動も物理的強制でないなら情報によって左右されるので、心の操作は究極的には情報の操作によって行われると考えているのである。

なお、西田は執筆当時 (1995年)、脳と記憶に関して、記憶は、ひとたび長期に渡る記憶構造に結び付いて保存されると、脳に損傷でも受けない限り、一生それは失われることがなく、古いビリーフシステムである古い思考の装置は、発達こそしないが埃をかぶった古い機械のように、思考の作業場の片隅に放置されているような状態にあると述べている (p.82)。しかし、宮脇 (2009) でも述べたように、現代の最新の脳科学では、この西田の表現は適切ではなくなったと言わざるを得ない。なぜなら、記憶は、思い出す度に、その時のゴール (目的) とキュー (合図) によって影響を受け再編集されるものであり、そもそも、記憶とは、実際に起こったことがそのまま記憶されるのではなく、出来事が起こった時の感情などによって影響を受け、加工されるものなのである。⁽¹¹⁾

以上の西田 (1995) の研究から分かることは、次の3点である。

- ・洗脳とは、長時間、拘禁状態で拷問したり、薬物を投与したりして、個人の精神構造を、強制的に生理的に変化させるものであり、人が生理的な錯乱状況に陥るまで、外部から与える刺激をコントロールして、個人の反応を操作者の考えに沿わせようとするものである。
- ・破壊的カルトのマインドコントロールとは、組織などの目的成就のために、人が他者から影響を受けていることを知覚しない間に、一時的あるいは永続的に、個人の精神プロセス (認知・感情) や行動に影響を及ぼし操作すること、つまり、他者が個人の意志決定過程に影響を及ぼすことである。

(11) 詳しくは、宮脇 (2009, pp.198-201) を参照のこと。

- ・人間の意志決定プロセスを情報処理システムと捉え、ボトムアップ情報をコントロールする方法を一時的マインドコントロールとし、トップダウン情報をコントロールする方法あるいは両方の情報をコントロールする方法を永続的マインドコントロールとしている。

2. 本稿で用いる洗脳の設定化

上記1.の洗脳に関する主要な先行研究のレビューから、洗脳の捉え方を表に整理すると下記の表2となる。この表2では、各先行研究が、洗脳をどのように捉えているかを示している。

表2を説明すると、縦軸は先行研究を時系列に並べ、横軸は、洗脳を身体的暴力が伴うものか、あるいは身体的暴力を伴わず、本人に悟られないように影響を与え最終的に従わせるのかという要素と、洗脳の効果の期間の長さを組み合わせた項目となっている。

まず、Hunter (1951, 1956) は、洗脳を思想の教化として捉え、変脳を人の記憶を消し、別の記憶を脳に埋め込むものとしており、変脳では、催眠術や薬とともに、肉体的苦痛につながるが身体的暴力を必ずしも必要としないとしていることから、思想教化のプロセスである洗脳には、身体的暴力が伴うと考え、Hunterの言う洗脳を①の(A)・(B)欄に記入し、変脳をそうではないも

(表2) Hunter (1951, 1956), Shein 他 (1961), Lifton (1961), Hassan (1988) および西田 (1995) による洗脳の捉え方

先 行 研 究	項 目			
	主に身体的暴力を伴い、外的な力で従わせる。		身体的暴力は必ずしも伴わず、本人に悟られないように影響を与える。	
	(A) 一時的	(B) 永続的	(C) 一時的	(D) 永続的
① Hunter (1951, 1956)	洗脳 (Brain-washing)		変脳 (Brain-changing)	
② Shein 他 (1961)	強制的説得	洗脳	—	—
③ Lifton (1961)	思想改造		—	—
④ Hassan (1988)	洗脳		マインドコントロール	
⑤ 西田 (1995)	洗脳		マインドコントロール	

のとして、①の (C)・(D) 欄に記入した。なお、Hunter (1951, 1956) では、洗脳の効果の期間に関する詳述はないので、一時的と永続的という区別は行わないことにした。

次に、Shein 他 (1961) は、永続的に思想改造が行われたものを洗脳と考えていたが、そのような状態の人は、インタビュー調査からは殆ど現れず、身体的暴力を伴い一時的に思想を受け入れた状態を強制的説得と考えていたことから、Shein 他の強制的説得を、身体的暴力を伴い外的な力で一時的に従わせる欄である②の (A) 欄に記入した。なお、Shein 他が考える洗脳は、永続的であり、かつ身体的暴力を伴い催眠・薬が使用されるものなので、②の (B) 欄を洗脳とした。

そして、Lifton (1961) は、洗脳を曖昧で中身が分からないものとして捉えており、その代わりに、主に身体的暴力を伴いながら感情攻撃などを行うものを思想改造としているので、これを、表の③の (A)・(B) 欄に思想改造として記入した。なお、思想改造の効果の期間に関する詳述はないので、Hunter の場合と同様に、一時的と永続的という区別は行わないことにした。

最後に、Hassan (1988) および西田 (1995) は、身体的暴力を伴うものを洗脳として捉えているので、これを④と⑤の (A)・(B) 欄に洗脳として記入した。なお、洗脳の期間に関する詳述はないので、一時的と永続的という区別は行っていない。一方、身体的暴力を必ずしも伴わず無意識のうちに影響を与え、一時的あるいは永続的な効果を持つものをマインドコントロールとしているので、これを④と⑤の (C)・(D) 欄にマインドコントロールとして記入した。

以上の先行研究の整理点を踏まえて、これまでの研究が曖昧にしていた点や見落としていた点を集約すると、次の3点となる。

- ・まず、洗脳かマインドコントロールかの区別は、主に身体的暴力を伴うか否か、一時的か永続的か、無意識のうちに影響を与え操作するか否か

という視点から区別されているが、この分類の仕方自体が曖昧さを生み出していると考えられる。なぜなら、身体的暴力の有無や効果の期間、洗脳あるいはマインドコントロールで行われた経過あるいは結果を外的に見たものであり、そもそも洗脳あるいはマインドコントロールによって、なぜ思想や信念などが変化したかの真の原因を示すものではないからである。すなわち、物事を外から捉えるだけで、中で何が行われているかに焦点が当たっていないので、明確な定義づけを行うことが難しくなっているのである。

- ・次に、Shein 他 (1961) の「解凍、変革および再凍結」の3つのステージや Lifton (1961) の12のステップと8つのコントロール要素、あるいは Hassan (1995) のマインドコントロールの4つの構成要素や西田 (1995) のボトムアップ情報とトップダウン情報のコントロールによるマインドコントロールの仕組みなどは、現象と反応から導き出した経験則であり、メカニズムそのものを明らかにしたものではない。例えば、Hassan (1988) が示した方法でマインドコントロールを行っても、当然、上手くいく場合もあればいかない場合もあり、上手くいかない理由が、例えば、集団の圧力が弱かった、あるいはトランス状態が浅かったからだとしても、それらを強めたり深めたりすれば、人はきちんとマインドコントロールされるかと言われれば、それは分からないとしか言えない。なぜなら、いろいろな要素が影響し合っていることは事実だが、そもそも、なぜ、マインドコントロールという状態に人が陥るかに関するメカニズムが解明されていないからである。
- ・最後に、Hunter (1951) から西田 (1995) までの研究の間には、一般的に「脳」の仕組みが殆ど解明されておらず、マインド（心）とはどこにあるのか、あるいはなぜ洗脳やマインドコントロールが起こるかについて、脳科学の視点からの考察を行うことができなかったのである。

これらの点を克服し、洗脳に関する研究を深めるためには、従来の心理的な

側面からだけでなく、最新の脳科学の視点から洗脳を捉える必要があると考えられる。なぜなら、心（マインド）は脳が作り出したものであり、脳こそが人の思考や信念などを作り出しているからである。

以上のような理由から、本稿では、最新の脳科学の視点から、洗脳という言葉の定義することにした。本稿で用いる洗脳とは、脳の神経レベルでの情報処理・信号処理のプロセスに、何らかの介入的な操作を加えることによって、人の思考、行動および感情を思うままに抑制しようとするものとする（苫米地 2000, p. 4）。なぜなら、洗脳とは、人の脳内のニューロン（群）⁽¹²⁾の連結パターンを、意識的に、そして無意識的に操作することだからである。したがって、洗脳の効果が一時的か永続的かもニューロンの結び付きの強度に依存することになるとともに、身体的暴力を伴うか否かも、脳内のニューロンの結び付きを変化・強化させる手段の違いだけであり、身体的暴力を伴わず無意識的に影響を与えるから洗脳ではないということにはならないのである。

また、洗脳とマインドコントロールを区別しておくとして、苫米地（2000）も述べているように、マインドコントロールの直訳は「心の操作」となるが、現代の脳科学では、心とは脳内のニューロン（群）のやり取りによって生み出されたものと考えられているので、心の操作という表現は適切ではなく、やはり、脳の操作という意味の洗脳の方が適切であると考えられるのである。

以下では、脳科学の視点から見た洗脳に関して、詳しく考察していくことにする。

IV 脳科学から見た洗脳とは

本節では、苫米地（2000）と Taylor（2004）をもとに、最新の脳科学の知識を用いて洗脳を考察していく。特に、洗脳された脳の状態に焦点を当てて、潜在的洗脳がどのようなものかを探っていきいたい。

以下では、まず、本稿に必要な限りで、富永（2006）をもとに、脳を形成す

(12) ニューロンとは、脳の神経細胞のことであり、これらの集まりをニューロン群と呼ぶ。詳しくは、本文 94-95 ページを参照のこと。

る脳細胞の基本的な機能や役割を説明する。次に、洗脳の目的や洗脳を行うにあたっての障害から洗脳されやすい脳の要件を検討していく。そして、洗脳されると脳がどのような状態に変化するかを示し、最後に、洗脳方法の分類や洗脳を行う時の問題点から、潜在的洗脳の恐ろしさを明らかにしていく。

以上の考察を通して、脳科学の視点から、洗脳された脳の状態を明らかにし、次節で検討する脳内のニューロン（群）間の連結パターンの総和である認知の風土⁽¹³⁾が書き換えられる仕組みの解明の礎を築いていく。

1. ニューロンとは

ここでは、富永（2006）をもとに、脳を形成する脳細胞の基本的な機能や役割を説明しておく。まず、(1)で、脳細胞がニューロンとグリア細胞から構成されていることを、次に、(2)で、ニューロン内およびニューロン間で情報がどのように伝達されるかを述べていく。

(1) ニューロンとグリア細胞

人体は、脳に限らず、全てが細胞から構成されており、その数は60兆個とされている。特に脳を作る細胞は、ニューロン（神経細胞）とグリア細胞の2種類である（富永2006, pp. 138-139）。ニューロンが主役で、グリア細胞が脇役と言われている。

まず、ニューロンは、中心が星型で核を1つ持っている神経細胞体であり、あちこちに枝を伸ばしている。伸びている枝は2種類あり、1本だけある長いものが軸索（神経線維）と呼ばれ、他のニューロンに情報を伝達するのに対して、上下左右に広がる短いものは樹状突起と呼ばれ、情報を受け取る役目を果たしている。

大脳の中には、ニューロンが約140億個もあり、複雑に連結し合っている。1つのニューロンの軸索（神経線維）が他のニューロンの樹状突起へと伸び、

(13) Taylor (2004) は、思考の仕方や考え方の枠組みなどの、脳内のニューロン（群）の連結パターンを「認知の風土」と呼んでいる（p. 38, 訳 p. 61）。

結合することで、情報の受け渡しが行われる「場」が設定される。この結合部はシナプスと呼ばれるが、シナプスは1つのニューロンに平均1万個あると言われている。このようなニューロンの複雑なネットワークは、脳の中で情報処理を行う最小単位となり、人の思考を支えている^{(14) (15)}。

次に、脇役のグリア細胞は、脳の各所で様々な役割を果たし、例えば、血管とニューロンの間に入り、血液中のブドウ糖をニューロンに送ったりしている。

(2) ニューロン内およびニューロン間の情報伝達

ニューロン内の情報は、電気信号として伝わっていく（富永 2006, p. 142）。問題は、ニューロンとニューロンの間、すなわちシナプスの部分である（p. 144）。なぜなら、結合すると上述したが、実際は、20 から 30 ナノメートル離れており、わずかな隙間があることで、電気信号が届かないからである。そこで、シナプスでの情報のやり取りには、例えば、グルタミン酸やドーパミンなどの神経伝達物質を用いた化学信号が使われている⁽¹⁶⁾。

2. 洗脳されやすい脳とは

ここでは、脳科学からみた洗脳を深く理解していくために、まず、(1)で、洗脳の目的を示し、次に、(2)で、洗脳を行う際に生じる脳内のニューロン（群）

-
- (14) Zaltman(2003)は、異なるグループのニューロン、つまり思考は、相互に行き来しながら伝達を行っていることをあげている（p. 41, 訳 pp. 63-64）。ニューロンの活動は、音、触感、動作、ムードおよび感情などによって刺激を受け、例えば、ビールのCMがニューロンを活性化したとすると、友人と居酒屋で飲んだ経験や初めてビールを飲んだ時の苦い経験、さらには彼女とデートした経験など、異なる種類の他のニューロンと相互に関連し活性化を引き起こすことになる。また、Zaltman(2003)は、同時に活発化するニューロンはつながり合い、ニューロン群となって思考が形成されること、すなわち、異なるニューロン群がつながることにより、思考のシステムが作られることを指摘している（p. 147, 訳 p. 176）。
- (15) Harris (1998)では、思考が脳内のニューロンの情報のやり取りで生まれることに加えて、例えば、私たちは生まれてから両親や親戚、地域の人たち、あるいは社会規範や文化に囲まれて成長することから、社会環境の影響を受けながら、脳が思考を生成することも指摘している（p. 153, 訳 p. 193）。
- (16) 詳細は富永（2006）の144-145ページを参照せよ。

に関する障害や抵抗を整理する。これらを通して、洗脳されやすい脳とはどのような脳なのか、またその要件を明らかにしていく。

(1) 洗脳の目的

洗脳の主な目的は、被洗脳者の思考を、洗脳者にとって好ましいものに変化させることであり、行動の変化は2次的な目的となる (Taylor 2004, p. 97, 訳 p. 137)。また、洗脳は、被洗脳者の独立した自己の主体性を排除することで、身体的にも精神的にも完全な支配を目指している (p. 93, 訳 p. 133)。したがって、洗脳の理想型とは、被洗脳者の思考の仕方あるいは考え方が大きく変化し、全ての行動と理解のプロセスが、新しい思考の仕方や考え方によって説明し直される状態である (p. 97, 訳 p. 137)。つまり、思考の仕方や考え方の枠組みである脳内のニューロン (群) の連結パターンを描く「認知の風土」を書き換えることが洗脳の目的なのである。

(2) 洗脳の障害

上記(1)で述べたように、洗脳の目的は、思考と行動の両方をコントロールすることにある。ただし、直接的に脳を変化させることはできないので、脳が囲まれている環境を変化させることで洗脳を行おうとする。その際、次の2点が障害となる (Taylor 2004, pp. 210-212, 訳 pp. 275-278)。

①思考や信念、記憶を変化させるのに必要な時間と努力の量

新しい思考や信念、記憶などは、習慣となり、また、無意識なものになることによって、他の思考や信念、記憶のニューロン (群) のネットワークから攻撃される可能性を極度に減らすことができる。しかし、そのためには、それらのニューロン (群) が繰り返し強化されなければならず、時間と継続的な感化の試みが必要になる。なぜなら、新しい思考や信念、記憶が意識の閾値よりも十分低いところに置かれ、他のニューロン (群) のネットワークと馴染むまでは、常に、既存のネットワークから疑いを持た

れる可能性を秘めているからである。

②ニューロン（群）のネットワークの類似性、数および強さ

まず、洗脳者が抱く好ましい思考や信念、記憶のネットワークと被洗脳者のそれが矛盾しない方が、疑いの思考を誘起せず、また、取り入れる際の努力も必要なくなるために適合しやすく、受容が容易になる。

次に、ニューロン（群）のネットワークの数が多い場合には、脳への刺激を様々な柔軟な方法で処理できるので、新しい思考や信念、記憶を押し付けることは難しくなる。また、ニューロン（群）のネットワークが平均より少ない場合にも、それらが確立されていれば、それが自分の信念となっており、洗脳されにくくなる。

最後に、強力な信念を持っている場合には、自分の思考や信念、記憶が脅かされていると感じることがないほどに安定しているので、新しい思考や信念、記憶を取り入れやすいとは考えられないのである。

以上のことから、若い、教育が十分でない、創造性を欠く、あるいは経験が少ない脳は、入ってくる情報と記憶に蓄えられる情報とのバランスが悪く、脳内の情報が入ってくる情報に偏っており、このような人は、刺激反動的となり、立ち止まって考えるよりも、その時々⁽¹⁷⁾の環境に反応する傾向が強くなるのである（Taylor 2004, p. 211, 訳 p. 277）。逆に、高齢で、十分な教育を受け、経験豊富な脳は、その時の環境に反応する感情に抵抗できる経験を持っており、このような様々な経験が感受性の高い分化した精神を育むことで、刺激による圧力を受けにくくし、また、精神操作を受けにくくしているのである（pp. 211-212, 訳 p. 277）。このように、洗脳されていることを検出し抵抗する術は、年齢、教育、創造性および人生経験によって育まれた豊かなニューロン（群）のネットワークに依存するのである。

3. 洗脳状態とは

上記2.で、洗脳されやすい脳の要件を示したが、ここでは、洗脳されると、脳はどのような状態に陥るかを説明していきたい。

洗脳とは、被洗脳者の意志とは関係なく一方的に行われるものであり、被洗脳者の無意識を直接的または間接的に操作するものである（苫米地 2000, p. 34）。すなわち、洗脳とは合理的な説得ではなく、気づかれないうちに強制的に行われるものである（Taylor 2004, p. 92, 訳 p. 133）。もちろん、暴力や暴言などを用いて行われるものもあるが、後の4.(1)で述べるように、このような方法では、心の中に大きな抵抗を生むことになり、かえって洗脳が難しくなるのである。

人は洗脳されると現実の世界と仮想現実の世界の区別がつかなくなる（苫米地 2000, p. 3）。苫米地によれば、人は仮想現実の世界では、主観的にはうっとりする夢想空間を魂が漂流しているような状態となっているが、客観的には、緻密に計算された虚構の世界に閉じ込められた状態に陥っているのである（p. 3）。洗脳され仮想現実の世界に入り込むと、人は、無理な命令に対して何の判断もなく絶対服従し、昼夜を問わず一生懸命に取り組むようになり、一見、

(17) Taylor (2004) は、洗脳の障害になるものとして社会的な安定のレベルもあげている。彼女は、私たちの思考に影響を及ぼす要素は、個人の内側にあるものだけではなく、社会的な相互関係や文化的コンテクスト、私たちが生涯を送る組織集団および誕生以来接してきた環境によって作り上げられていると述べている（p. 218, 訳 p. 287）。また、個人的なレベルだけでなく社会的なレベルでも、高い安定性を持つことは、選択の容認を促進し、個人または社会のスキーマにあたるニューロン（群）のネットワークのようなものを豊かにして、多様性を高めるとしている（pp. 222-223, 訳 pp. 292-293）。逆に、個人的にも社会的にも不安定である場合には、選択の幅が狭まり、個人的にも社会的にももの見方が偏ることで、理想と現実の不釣り合いに関するリアクタンス（拒絶）を増大させ、ある行動を取ることの強烈な動機づけになり得ると指摘している（p. 223, 訳 p. 293）。

(18) 仮想（現実の）世界とは、人の脳が想定することができる潜在的な存在としてのあらゆる仮想世界のことである（苫米地 2000, pp. 20-21）。本稿では、Kripke (1972) が述べた「世界があり得たかもしれないあり方の全体、あるいは世界全体の諸状態ないしは諸歴史のこと」という可能性世界（p. 18, 訳 p. 20）に加えて、物理的現実世界ではその存在可能性を問うことのできないSF的な意味での仮想世界も含めたものとする（苫米地 2000, p. 21）。

自分を全く無くして他人に動かされているように見えるようになる。しかし、このような行動は、被洗脳者にとっては、他者の命令ではなく、その人自身が自分自身のために行っていると思っ
て行っていることであり、これらの行動の責任は、当然、被洗脳者自身にあると考えて行動しているのである (Taylor 2004, p. 98, 訳 pp. 137-138)。

被洗脳者は、洗脳されると、意識の中で、自己犠牲や修行、高度な知識の習得などの「高尚かつ崇高」な行為を遂行しているつもりになっているとともに、無意識の中では、洗脳による奉仕活動の擬似的な涅槃の状態の中に、その人が欲するものの全てが作り出されることによって、快楽を感じているのである (苦米地 2000, p. 4)。つまり、現実と切り離された仮想現実の中では、人は思考を停止し、洗脳者や組織のために働くことに喜びを感じるように思考をすり替えられているのである。また、仮想現実への逃避は、人間的な感性を鈍化させ、現実世界で感じる痛みを希薄にし、他者に対する関心を失わせるのである (p. 34)。例えば、食思不振症の人は、痩せていることと食事制限が主体的な価値観として認知の風土を強力に支配しているため、それらが考え方や行動の鍵となり、健康、自由および幸福などの自分の客観的価値を追求することができなくなる (Taylor 2004, p. 256, 訳 p. 337)。これは、後のVの5.の(2)の③で説明するように、人から洗脳される、あるいは自分自身で自分を洗脳する際には、少数の強固な考え方を注ぎ込まれる、あるいは少数の強固な考え方に固執するようになるだけでなく、その注ぎ込まれる、あるいは固執するプロセスに伴って認知の範囲が狭められることから、現実世界そのものが現実世界でなくなることにつながることを意味しており (p. 256, 訳 p. 336)、現実世界では当たり前前の人間の感性を損なわせるのである。

以上のような洗脳状態の人の特徴としては、洗脳が関与する思考や信念、記憶が感情と結び付き強力になっていることから、洗脳の間や後に新しい信念を攻撃すると、感情的になり、敵意に満ちた抵抗を行うことをあげることができる (Taylor 2004, p. 12, 訳 pp. 28-29)。

4. 潜在的洗脳の手口

ここでは、なぜ、被洗脳者は自分自身で気づかないうちに洗脳されてしまうかという、潜在的洗脳の手口を明らかにしていく。そのために、まず、(1)で、洗脳される時の状態や深度・時間などの視点から洗脳方法を分類し、次に、(2)で、自由の感覚とリアクタンスの感覚という2つの視点から、洗脳を行う時の問題点を示し、最後に、(3)で、(2)の問題点を克服して行われる潜在的洗脳の手口を暴いていきたい。

(1) 洗脳方法の分類

洗脳とは、力によるものや潜在的に行われるものを含めて、テレビからテロまで広く分布する感化技術の一部である (Taylor 2004, p. 96, 訳 pp. 135-136)。このような感化の試みは、簡単な説得から強制的な洗脳まで様々なものがある。洗脳を、被洗脳者の意識の状態と時間・深度で区分すると、表3のようになる (苔米地 2000, pp. 5-7)。

表の縦軸には、被洗脳者が意識された状態かどうか、横軸には、洗脳が即効的かどうか、および洗脳の深さを表している。

まず、表の左上は、被洗脳者が意識された状態で洗脳を行うことになるので、被洗脳者の心理的抵抗が当然起こることになるのだが、本人が抵抗したとしても強制力を働かせることで、いつの間にか相手をコントロールしてしまう状態を示している。例えば、独房に長い間放り込んだり、ロールプレイングなどで主従関係を強制したりして、いつの間にかこの関係を固定させてしまうなどの方法がある。これらは、肉体的な刺激が強く、脳の思考回路が変更されるわけではないので、浅い洗脳となり、即効的となる。なお、苔米地(2000)は、意識された状態で行われる洗脳も、ある程度洗脳が進むと、無意識化されていくと述べている (pp. 5-6)⁽¹⁹⁾。

(19) Taylor (2004) は、暴力や言葉などによる恐怖を用いて作られた洗脳状態でも、被洗脳者は、最終的には強制されたと思うのではなく、自ら進んで受け入れたと思うようになると指摘している (p. 12, 訳 p. 28-29)。

(表3) 洗脳レベルの区分

被洗脳者の状態／時間・深度	即効的・浅い	遅効的・深い
意識された状態	・肉体的刺激が強い ・抽象度が低い	—
気づかれない状態 (無意識に働きかける)	—	・肉体的刺激が殆どない ・抽象度が高い

次に、表の右下は、被洗脳者に気づかれないように洗脳が行われるため、心理的な抵抗を受けることなく、脳の思考回路を変更するものである。気づかれないように脳への刺激を行うため、手の込んだ仕掛けと時間を要することになる反面、その分、深い洗脳となる。基本的には、表の左上と目的は同じであるが、被洗脳者に意識させないので、極めて巧みな洗脳となる。

最後に、表の左下と右上については、どちらも縦の項目と横の項目が相反するため、そのような洗脳は、基本的には考えられないので、本稿の対象外とする。

表3の要素の他に、苦米地(2000)は、洗脳の際には、深度だけでなく、刺激の種類も重要な要因になると述べている(p.8)。具体例として、薬物刺激、言語的な刺激情報や抽象思考を利用した言語誘導による催眠、過呼吸などの呼吸法および肉体的な運動などをあげ、これらの刺激をどのように利用するかによって効果や結果が異なってくるとしている。

また、Taylor(2004)は、1つの感化の試みの本質と効果には、多くの個人的・社会的要因が影響していると述べ、例えば、個人の人格や生きる姿勢、行動と感化の目的との差異、感化に要する時間と努力、イデオロギー的背景、社会の構造、強制の種類と強さ、および洗脳者と被洗脳者の相対的な社会的権力などをあげている(p.96, 訳p.136)。

以上のように、洗脳の方法は、いろいろな要素を組み合わせで行われるが、大きく分けると、意識された状態で肉体的苦痛を伴う強制的な洗脳と、気づかれないように行われる潜在的な洗脳に分けることができ、このどちらも、脳の神経レベルでの情報処理・信号処理のプロセスに、何らかの介入的な操作を加

えることによって、人の思考、行動および感情を思うように変更しようとするものである。

(2) 洗脳を行う時の問題点

Taylor (2004) は、自由の感覚とリアクタンスの感覚という語句を用いて、洗脳を行う時の問題点を説明している (p. 204, 訳 p. 267)。まず、自由の感覚とは、安全シグナルとして作用するものであり、物事を自己のコントロール下にあると感じることができる感覚のことである。もちろん、全ての事をコントロールできる場合もあれば、そうでない場合もあるが、一時的にでもリラックスしたと思うのに十分なものであれば、それが自由の感覚をもたらすのである。一方、リアクタンスの感覚は、脅威のシグナルであり、何かがコントロール不能になっていることを示すものである。リアクタンスは、私たちが物事を行う際に、脳の中で行われる予測と実際の結果が適合しない場合に発生するエラーシグナルである。

この2つの感覚は、互いにバランスを取っており、自由の感覚は、リアクタンスの感覚とつり合うことで存在しているので、全てがうまくいくとエラーシグナルが出ず、リアクタンスの感覚を持つことがなくなり、私たちは自由の感覚を持つようになるのである (p. 200-201, 訳 p. 263)。言い換えると、自由の感覚を持つかどうかの判断は、リアクタンスの感覚を引き起こすかもしれない状況や気分、そして判断を迫る人などに依存しているのである (p. 204, 訳 pp. 267-268)。

以上のように、私たちは操作されていると感じる度に、つまり、リアクタンスの感覚が自由の感覚を上回る度に、不自由を感じ、その理由を考える機会を持つようになるのである。しかし、これは感化しようとしている洗脳者側からすれば、最大の難問となる。なぜなら、力による感情的打撃を伴う強力で急激

(20) Taylor (2004) は、自由の感覚を、単なる認識以上のものであり、脳の活動パターンに由来する感情であると捉え、私たちが変えられることと変えられないことを知る知恵を与えてくれる感情のシグナルとしている (p. 203, 訳 p. 267)。

な変化で洗脳する場合、すなわち、肉体的苦痛を伴う強制的洗脳では、強制力によってこのリアクタンスの感覚を凌駕することはできるのだが、密かで穏やかな変化、つまり潜在的に洗脳を進める場合には、私たちが感化されていることに気づくのを迂回するような手段が必要となるからである (p. 207, 訳 p. 271)⁽²¹⁾。このような手段として、例えば、自由の感覚が、脅威のシグナルであるリアクタンスの感覚によって損なわれているのであれば、人工的にその脅威のシグナルを減ずることで、実際は自由でなくても自由と感じさせたり、また、逆に、リアクタンスの感覚を高めることによって、感じた脅威から自分の自由を守るために、普通は行わないような行動を取るように刺激したりするなどの手段がある。

(3) 潜在的洗脳方法の第一歩

上記2.の(2)でも述べたように、洗脳では、脳を直接変えることはできないので、被洗脳者の肉体的・社会的環境を操作することによって、間接的に洗脳を行おうとする (Taylor 2004, p. 15, 訳 p. 33)。私たちは、程度の差こそあれ、他人の環境を変えることに携わっており、その中でも洗脳は極端な場合であり、洗脳者は最終的に、被洗脳者の心 (脳) を支配するために、彼らの住む世界を完全にコントロールすることを目的としている (p. 15, 訳 p. 33)。ここで言う環境のコントロールとは、Lifton (1961) によれば、人間的コミュニケーションのことであり、人が外界とのコミュニケーションで行う、「見、聞き、読み、書き、経験し、表現する全て」のみならず、私たちが自分自身とコミュニケーションを行う内面的な精神生活にまで踏み込んで、支配を目指すことである (p. 420, 訳 p. 438)。

被洗脳者の信念や感情、行動を変化させるためには、力を用いる、被洗脳者と密な関係を作る、および合理的な説得などを利用して、対象者を誘惑したり強要したりして、嫌悪感、反感あるいは無力感を与えるか、喜び、感謝ある

(21) 潜在的な方法で集団を洗脳する場合には、困難を伴うことも指摘されている (Taylor 2004, p. 231, 訳 p. 303)。なぜなら、様々な背景や信念、欲求を持った集団の中では、洗脳者の意図が露見する危険性が大きく、また、その集団が情報源の選択肢を持つ場合には、洗脳から逃れる危険性がより大きくなるからである。

いは権力意識を与えることで行われる (Taylor 2004, p. 97, 訳 p. 136)。その過程では、洗脳者は、自分のレトリックを神秘的²²⁾概念と結び付けながら、巧妙な言葉を用いて、自分の主張を明確で覚えやすいものにする²²⁾ことで、洗脳に関連する連想を被洗脳者の脳に押し込もうとしている (p. 231, 訳 pp. 303-304)。洗脳者は、被洗脳者がさらに不幸と感じて、自分が与えようとしている「援助」を求めるように誘導するのである。

ところが、人の脳は、現在与えられている情報が、自分の思考、信念および経験と一致しない場合には、その不一致を検出するようになっており、その不一致のギャップが大きすぎると、新しい概念が受け入れられる可能性は低下するのである。これに対して、小さな一歩は受け入れられやすく、それを手がかりに洗脳の度合いを深めていくことは可能となるのである。なぜなら、大きい不一致は受け入れにくい²³⁾が、自分の考え方とは異なるけれども、小さい不一致は受け入れやすいからである (Cialdini 1988)。Cialdini (1988) は、この理由を、返報性のルールを用いて説明している。返報性のルールとは、「他人がこちらに何らかの恩恵を施したら、似たような形でそのお返しをしなくてはならない」というルールである (p. 21, 訳 p. 23)。人は、この返報性のルールがあるために、親切や贈り物、招待などを受けると、そうした恩恵を与えてくれた人に対して将来お返しをせずにはいられない気持ちになるのである (p. 21, 訳 p. 24)。

この返報性のルールは、Cialdini (1988) によれば、2人の人間の間の平等

(22) 本稿では、神秘的概念を、通常の世界では起こりえないような「超自然的な現象」のこととしておく。なお、神秘的概念は、自然に発生したものだけでなく、神秘的操作によって人為的に作られたものも含むものとする。例えば、本文のⅢの1.(3)でも述べたように、Lifton (1961) によれば、神秘的操作とは、環境の中から自然に発生したような方法で、人から特定の感情や行動を導き出そうとするものである (p. 422, 訳 p. 440)。この神秘的操作では、特殊な神秘的雰囲気そのものが、神秘的操作を正当化するだけでなく、強制させており、神秘的な雰囲気の中では、例えば、高尚な目的感、社会発展が進む中で今まさに起ころうとしているいくつかの原理を直接的に知覚しているという感覚、そして、その社会発展の中で自分が先陣を切っているという感覚を持つようになる²⁴⁾とともに、神秘的な命令を実行するように、歴史、神および他の超自然的な力によって選ばれたという感覚も持つようになるのである。

な交換を促進するために発展してきたものであるが、完全に不公平な結果を導くために利用することもできるのである (p. 35, 訳 p. 42)。人間社会のシステムの中では、相互に助け合うことが極めて重要で、私たちは恩義を受けた時に不快になるように条件づけられており、他者の最初の親切に返報する必要性を無視するようなことがあれば、相互にお返しをつなげていく鎖を断ち切ることになり、そのような人が将来再び親切を受ける可能性は少なくなるだけでなく、返報性のルールを破る人、すなわち、他者の親切を受け入れるだけでそれに対してお返しをしようとしないう人は、社会集団のメンバーから嫌われることになることから、この恩義の感情を利用して、最初の小さな好意から、お返しとしてもっと大きな好意を引き出すことができるのである (p. 36, 訳 p. 43-44)。また、そもそも、人間の知覚にはコントラストの原理があり、例えば、2番目に提示されるものが最初に提示されるものとはかなり異なっている場合、2番目のものが実際以上に最初のものとは異なっていると考える傾向があり、順番に提示されるものの差異を私たちがどのように認めるかに影響を与えることから (pp. 12-13, 訳 p. 15)、最初に大きい不一致を提示した後には小さな不一致を提示すれば、不一致であるという認識が薄れることになるのである。したがって、自分の考えとは一致しない異なることでも、その不一致が小さく、相手の好意にもとづくことや親切を私たちが断りづらく、受け入れてしまう傾向があり、しかもいったん受け入れてしまえば、その好意を返報しなければならないと思うようになるので、洗脳者は、そこから徐々に、被洗脳者の脳内のニューロン（群）のネットワークを部分的に書き換えていくことができるのである。

V 洗脳による認知の風土の書き換え

本節では、苦米地 (2000) と Taylor (2004) をもとに、最新の脳科学の知識とホメオスタシスのフィードバック関係の理論を用いて、洗脳によって脳内のニューロン（群）間の連結パターンの総和である認知の風土が書き換えられる仕組みを明らかにしていく。

以下では、まず、ホメオスタシス仮説を説明する。次に、ホメオスタシスのフィードバック関係が結ばれた脳の状態である変性意識状態を解説し、続いて、ホメオスタシスのフィードバック関係を永久ループにするトリガーとアンカーの役割を述べていく。そして、苦米地（2000）の洗脳を行うための4つのステップを示し、最後に、この4つのステップが行われる際に、脳内ではどのような変化がもたらされるかを考察していくことにする。

以上を通して、脳内の認知の風土が書き換えられる仕組みを解明していく。

1. ホメオスタシス仮説とは

ホメオスタシスとは、生命体を維持する恒常機能のことである（苦米地 2000, p. 19）。生命体と物理的環境の間にはフィードバック関係があり、例えば、気温が上がれば発汗するなどの作用がある。この例のように、生命体の恒常性を維持することで、生命体の正常性を保とうとする生物の自律的なメカニズムをホメオスタシスと言う（p. 16, 19）。

ホメオスタシス仮説とは、上記のようなホメオスタシスのメカニズムを用いて様々な現象を説明できるという仮説のことである。特に、ホメオスタシスのフィードバック関係の「環境」とは、現実の物理的な環境だけでなく、仮想的なイメージや空想の世界にまで広がった環境となっている。なぜ、環境の要因に現実の物理的な世界だけでなく仮想の世界までもが含まれるようになったかと言うと、人は、脳機能の進化により、触ることのできない想像上の環境である仮想世界に臨場感を感じるようになり、仮想世界と恒常性維持のフィードバック関係を築くことができるようになったからである。

以上のように、私たちの記憶や思考などは、自分を取り巻く現実世界や仮想世界を含む環境との間で、ホメオスタシスのフィードバック関係を成り立たせるようになったのである。すなわち、脳の外部的な環境が本当の現実世界ではなく、映画や小説、TV ドラマなどの仮想的な環境であっても、一度、臨場感のあるフィードバック関係を成立させれば、脳は仮想的な環境から送られる情報を現実世界の情報であると錯覚を起こし、それらを記憶していくのである。

例えば、映画やTVドラマを見ていて手に汗を握ったり、夏場にお墓の傍を通ると急に体に寒気を覚えたりするなどのことは、人が進化の過程で、仮想世界に臨場感を感じることができる脳機能のメカニズムを持つようになったために起こることなのである。

なお、仮想世界とは、注(18)でも述べたように、人の脳が想定することができる潜在的な存在としてのあらゆる仮想世界のことである(苦米地 2000, pp. 20-21)。したがって、本稿で用いる仮想世界という言葉が表す世界とは、Kripke (1972) が述べた「世界があり得たかもしれないあり方の全体、あるいは世界全体の諸状態ないしは諸歴史のこと」という可能性世界 (p. 18, 訳 p. 20) に加えて、物理的現実世界ではその存在可能性を問うことのできないSF的な意味での仮想世界も含めたもの(苦米地 2000, p. 21)と考えている。

2. 変性意識状態とは

脳と現実世界や仮想世界の間には、ホメオスタシスのフィードバック関係が作られると、人は変性意識状態となる。これは、例えば、映画の主人公になりきって仮想現実の世界に浸ってしまう状態のことなどである。この変性意識状態とは、感覚が一切遮断された空間に長時間いた時に、意識が変形して、夢を見たり、酩酊したような感覚に襲われたりする意識状態のことである(苦米地 2004, pp. 8-9)。上記Ⅲの1.の(4)の④でも述べたトランス状態での意識に似た状態のことである。この変性意識状態になると、意識的な心的活動が抑えられ、無意識レベルにある心的内部表現が外部化するので、他者が心の奥底にアクセスしやすくなり、思考パターンなどの情報を書き換えることが可能になるのである。

このような変性意識状態がなぜ起こるかという点、変性意識と深く関わる脳神経回路の悪戯で起こっていることは明らかにされているが、それ以上のメカニズムはまだ解明されていない(苦米地 2000, pp. 11-12)。ただし、変性意識状態を経験した人にとっては、変性意識状態の世界には圧倒的なリアリティがあり、神秘的な体験となる。このような神秘的な体験は、仮想的な体験である

が、現実の物理的な世界よりも次元が高いと感じられるだけでなく、現実のような立体感や匂いなどの感覚も持ち、恍惚とした快感が走り、巨大な知識体系に一気に投げ込まれたような感覚となる。例えば、ランナーズハイの状態でもラソンをしている選手に、その気持ち良さは脳が作り出した仮想の感覚であると伝えても走ることを止めないように、神秘的な体験となるのである。そして、このような神秘的な体験をしてしまうことの問題点は、その体験が人にとって神秘的かつ絶対的なものとなるため、人に際限なく求め続けさせてしまうことである。

3. トリガーとアンカー

トリガーとは、引き金という意味で、脳に埋め込まれた記憶や情報などを引き出すことであるのに対して、アンカーとは、脳に埋め込まれた記憶や情報などのことである（苦米地 2004, p. 14）。被洗脳者は、トリガーに接触することで、忘れていた記憶を鮮明に思い出したり、脳内に埋め込まれた思考プロセスなどが作動して、自動的に思いがけない行動に駆られてしまったりする。なぜなら、人は、記憶を想起する際に、記憶を記録した時に深く関連するきっかけを与えられると、臨場感を持って想起することができるからである（Zaltman 2003, pp. 174-177, 訳 pp. 209-212）。したがって、神秘体験の体感感覚を脳内にアンカーし、それに対応する言葉や合図などをトリガーとしておくと、トリガーを利用して、いつでも神秘体験を体験させることができるようになるのである。

以上のように、洗脳では、深い変性意識状態に引き戻すためのアンカーを、ありとあらゆる脱洗脳状態に関係する事柄や考え方、言葉などのトリガーに結び付けておくことで、すぐに洗脳状態に引き戻すようにプログラムしているのである（苦米地 2000, p. 30）。

4. 洗脳のステップ

ここでは、苦米地（2000）の洗脳を行うための4つのステップを下記のように

に整理しておく (pp. 21-30)。

(1) 体感的条件づけ (ステップ1)

最初のステップでは、特定の表象と特定の臨場感状態を結び付け、ホメオスタシスのフィードバック関係を構築する。私たちが日常的に行っている、頭に思い浮かべたこととその時の感情などを結び付ける行為を用いて、記憶と体感的な経験を意図的に結び付けるのである。例えば、Aさんは、事前にインターネットでよく調べて大きい期待を持って予約したホテルに到着し、概観や内装、接客などの全てが自分の満足を満たすものであったが、部屋の窓を開け、真下に墓が見えた時、なぜか寒気を覚えてしまうことがある。このホテルはAさんにとっては期待通りの素晴らしいホテルであり、また、ホテルの部屋と墓とは別の空間であり、何の関係もないことは頭では理解しているが、墓は縁起が悪いという因習的な仮想世界の命題と、それに伴う嫌な気分が、ホメオスタシス機能を介在して脳にフィードバックされ、別空間の部屋にいるAさんが寒気を感じるのである。このように、体感的条件づけのメカニズムは、迷信や因習などで定義される仮想世界の命題を利用して、それらの命題と物理的な現実世界に存在している心と体を結び、ホメオスタシスのフィードバック関係を構築することで、人に影響を与えているのである。

(2) 臨場感の強化 (ステップ2)

ステップ2では、仮想世界の臨場感を、現実世界の臨場感よりも強くしていく。上記(1)のステップ1では、依然、臨場感は現実世界にあり、現実世界の中でたまたま窓の外の墓を見てぞっとしただけであり、一時的な気分に過ぎないのである。ところが、ステップ2では、現実世界の臨場感がさらに薄れ、仮想世界と現実世界を分からなくさせるのである。例えば、ホテルの自分がいる部屋の様子が目に入らなくなり、墓場の臨場感が部屋中を満たす状態になれば、仮想世界の臨場感が現実世界の臨場感を上回ったことになる。また、例えば、暗くてスクリーンの大きい臨場感がたっぷり味わえる映画館で映画を鑑賞して

いると、映画に集中して、椅子の感覚や周りに座っている人が気にならなくなり、やがて自分が主人公と同化して、自分の職業や今が平成21年であることを忘れ、銃撃戦で主人公が撃たれると、冷や汗が吹き出すとともに擬似的に撃たれた感覚に陥るのである。

以上のように、ステップ2では、仮想現実の臨場感が、現実世界のそれを上回ることになる。また、苦米地(2000)は、人がホメオスタシスを持っている以上、本質的に、誰も生得的にステップ2の仕掛けから逃れることができないと述べている(p.24)。

(3) アンカーの埋め込み(ステップ3)

ステップ3では、ステップ2の状態にある人にアンカーを埋め込み、トリガーを設置する。その理由は、アンカーとトリガーによって、あらかじめ埋め込んでおいた臨場感体験を即座に再現させるためである。先ほどの映画館の例で言えば、主人公や他の登場人物になりきって臨場感を感じていたとしても、映画が終わり、映画館の外へ出れば現実世界に引き戻されるのが普通である。その映画の臨場感がどれだけ強くても、通常、その影響は長くは続かないのである。しかし、ステップ3では、次の日も映画の臨場感から抜け出せなくなるような、いつでも臨場感を呼び起こせるような仕掛けを埋め込むのである。

(4) 永遠の洗脳サイクル(ステップ4)

このステップ4では、仮想世界の臨場感が現実世界の臨場感を完全に上回るように、仮想世界から逃れられないサイクルを作る。ステップ3で埋め込んだアンカーを引き起こすトリガーは、ありとあらゆる脱洗脳状態に関係する事柄、言葉および考え方に結び付けられており、もし、人が仮想世界から抜け出そうとしても、あるいは一時的に仮想世界から抜け出すことができて、直ぐに何らかのトリガーを踏み、埋め込まれたアンカーの臨場感が思い出され、仮想世界へ引き戻されるのである。ホメオスタシスの作用によって、脳と臨場感は結び付けられており、覚めることのない変性意識の循環サイクルが作り出さ

れていくことになる。こうなると、映画の例で言えば、映画の世界に住み続け、目の前に現実世界があり、それが目に入っている、見えていないという状態になるとともに、現実世界の方が映画の仮想世界のように感じられ、非常に現実感の乏しい状態の人間となるのである。

以上の4つのステップを通して、被洗脳者の脳の中に、永遠の洗脳サイクルを構築するのである。

5. 洗脳による認知の風土の解体と再構築

上記4.で述べた洗脳のステップの裏側では、すなわち、脳内では、ニューロン（群）の連結パターンである「認知の風土」が洗脳前の状態から書き換えられ、新しいものに再構築されている。ここでは、脳内のメカニズムに焦点を当てて、洗脳の仕組みを解き明かしていく。

以下では、まず、(1)で、認知の風土がどのように形成されるかを述べ、次に、(2)で、形成された認知の風土の役割と機能を明らかにすることで、認知の風土の解体と再構築の仕方を解明していく。

(1) ニューロン（群）の強化と反復による「認知の風土」の形成

ニューロン（群）間の連結パターンの総和が「認知の風土」を形成しており、その中の各連結パターンは、スキーマと呼ばれ、学習された思考や行動パターンを決定づけている（Taylor 2004, p. 124, 訳 p. 170）。ニューロン（群）間の連結が強いほど、ある刺激がスキーマ内のあるニューロンないしニューロン群を活性化しただけで、スキーマ全体が自動的に誘起されるようになる。強く、よく学習されているスキーマは、無意識のうちに頻繁に発揮され、私たちの意志決定を助けている。このような強いスキーマは、ニューロン（群）間の連結が強力で変更することが極めて難しいものである。したがって、もし、急激に変化したとすれば、何らかの外的要因による変化、つまり、洗脳を疑うことになる。逆に、弱いスキーマは使われる頻度が低く、意識しなければ簡単に変更されるものである。

このようなスキーマを構成するニューロン（群）間の連結は、それらが同時に活性化されるほど、活性化の頻度が高いほど、および活性化の刺激が強力であるほど強化されていく。例えば、2つのニューロンが同時に活性化されると、それらを連結しているシナプスは強化される傾向にあり、また、一方のニューロンが活性化されている場合にも、両者をつなぐシナプスが強くなり、もう一方のニューロンも活性化される可能性が大きくなるのである（Taylor 2004, p. 113, 訳 p. 155）。つまり、シナプスの強度とニューロン（群）の活性化度が、ニューロンの連結パターンの中の1つであるスキーマを作り、そのスキーマを強化していくことにつながると考えられるのである。したがって、脳は特定の刺激を受け続けると、特定のいくつかのニューロン（群）に、頻繁に電気信号を流すことで、シナプスを介してニューロン（群）を活性化し、しかも、ニューロン（群）間に流れる電気信号の刺激が強力になればなるほど、より一層、ニューロン（群）間の連結が強くなるのである。例えば、何かを覚えたり、技術を身に付けたりするためには、特定のいくつかのニューロン（群）を強化しなければならないのである。つまり、「反復」が必要不可欠なのである。言い換えれば、洗脳を行うためにも、「反復」は主要な要素となるのである。

(2) 認知の風土の役割と機能

ここでは、まず、①で、認知の風土を形成するニューロン（群）間のネットワークの自動化と単純化という認知の風土の役割を述べ、次に、②で、形成された認知の風土が果たす、情報を解釈するためのフィルター機能を説明し、最後に、③で、①や②で示した認知の風土の役割と機能を逆手にとった、既存の認知の風土の解体と再構築の方法を述べていく。

①ニューロン（群）間の連結ネットワークの自動化と単純化

認知の風土を形成する各ニューロン（群）間の連結パターンは、反復して使われることによって、同時に活性化されるニューロン（群）間のシナプスが変化し、電気信号が滑らかに流れるようになり、最終的には自動化が行われるよ

うになる (Taylor 2004, p. 133, 訳 pp. 179-180)。このおかげで、例えば、私たちは書くことから運転することまで、様々な技術を獲得することができるのである。すなわち、ニューロン(群)の連結が強力で熟練しているほど、そのネットワークを電気信号は容易かつ迅速に流れていくのである。また、同じ強さの電気信号でも、強力なニューロン(群)のネットワークの方が弱いものに比べて、より早く伝わるのである(p. 134, 訳 pp. 181-182)。さらに、ニューロン(群)の密度も重要であり、電気信号を伝え得るニューロン(群)が多いほど、個々のニューロン(群)を通過する電気信号の流れは弱く、ニューロン(群)全体の強度は以前と殆ど変わらないのである。

上記のような自動化が行われていくと、ニューロン(群)間の連結は、強く、そして単純なものになっていく。そうすると、そのニューロン(群)のネットワークの活性化は意識的な注意にまで及ばなくなるので、そのようなネットワークが示す思考や信念に疑問を抱くことはなくなる、あるいは疑問を抱くこと自体が難しくなるのである (Taylor 2004, pp. 133-134, 訳 pp. 180-181)。なぜなら、ニューロン(群)のネットワークを流れる刺激が強くと単純であれば、それに対する反応は迅速となるので、疑う余地を与えられないからである。また、他の考えを連想させることが少ない単純な思考は、比較的単純なニューロン(群)のネットワークとなり、逆に、複雑な思考は、ニューロン(群)のネットワークも複雑化している (p. 136, 訳 pp. 183-184)。

したがって、最も強力なニューロン(群)間のネットワークが示す思考や信念は、弱く保持している思考や信念に比べて、単純になる傾向が出てくるのである。そして、より強力で単純なニューロン(群)のネットワークは、行動に対してより大きなインパクトを持つ傾向にある (Taylor 2004, p. 137, 訳 p. 184)。

②情報の解釈のためのフィルター機能

脳に入ってくる情報は、スキーマなどの既存のニューロン(群)のネットワークを通る傾向が強くなる (Taylor 2004, p. 138, 訳 p. 186)。新しい情報と現状のスキーマなどのニューロン(群)のネットワークがうまく適合しない場合

には、情報は既存のネットワークには流れずに、既存のネットワークが調整されるか、新しい情報を流すために新しいネットワークを作るか、あるいは新しい情報が既存のネットワークに適合するようになるまで修正されるかのいずれかとなる⁽²³⁾。どの結果になるかは、既存のネットワークの連結の強さに依存する。ただし、強いニューロン（群）のネットワークは、新しい情報による挑戦に出会うことが多く、そのような場合には、既存のネットワークの調整などよりも、新しい情報を解釈するために新しいニューロン（群）を形成する傾向が強くなる（p. 138, 訳 p. 187）。逆に、弱いネットワークは、挑戦的な情報に反応して変化しやすくなる。

このように、私たちのスキーマなどの各ニューロン（群）のネットワークあるいはネットワークの総和である認知の風土は、私たちが受け取る情報に対するフィルターとして情報を解釈するだけでなく、それに対する反応の仕方にも影響しているのである（Taylor 2004, p. 139, 訳 p. 188）。私たちが自分の行動の理由を認識しようとしまいと、私たちの認知の風土（私たちが持っている思考や信念、記憶と関連するニューロン（群）の連結パターンの総和）が、その理由を規定しているのである。例えば、私たちは自分の考えに挑戦する考えを持った人よりも、好ましい心を持った人を選んで一緒に時間を過ごし、私たちが是認する情報源からニュースを獲得し、他人を困らせる本ではない本を読み、私たちが慎重に作り上げた認知の風土に穴を開ける恐れがある情報を無視または避けるなど、これらのことを認知の風土に沿って、無意識に行っているのである。

③認知の風土の解体と再構築

上記①と②で説明したように、私たちは強く単純な自動化されたニューロン（群）間の連結パターンの総和である認知の風土を持っており、それが様々な情報を解釈するフィルターの機能を果たしている⁽²⁴⁾。

(23) この3つの選択肢の詳細については、114ページの③の項目で説明する。

このような認知の風土は、私たちの思考の仕方や信念を表すものであり、強い思考や信念もあれば弱い思考や信念もあり、それらはニューロン（群）の結び付きの強さに関連しているのである。

Taylor (2004) は、思考や信念の変化について、もし1つの思考や信念が変化すれば、結び付いた他の思考や信念と矛盾することになり、その思考や信念が属するネットワーク全体の不一致を増大させ、認知の不協和⁽²⁵⁾を起し、ストレス状態を引き起こすと述べている (p. 128, 訳 p. 173)。もちろん、私たちが矛盾した思考や信念を維持することは可能だが、Festinger (1957) によれば、新しい情報に対する強制的または偶然的な接触は、既存の認知と不協和な認知要素を生み出すことがあり (pp. 261-261, 訳 p. 246)、2つの認知要素間に存在する不協和または協和の大きさは、これら2つの要素が持つ重要性と直接の関数になるとしている (p. 262, 訳 p. 247)。つまり、脳内に既に存在している認知の枠組みであるニューロン（群）の連結パターンとは異なる新しい思考や信念などが送り込まれた場合には、認知的不協和を引き起こし、さらに、その不協和の大きさは、新しい思考や信念ならびに既存のネットワークの重要性が高ければ高いほど、大きくなるのである。

そして、このような不協和の存在は、その不協和を低減させる圧力を生じさせ、また、不協和を低減させる圧力の強さは、既存の不協和の大きさの関数と

(24) Zaltman (2003) は、これをコンセンサスマップと呼んでいる (p. 129, 訳 p. 161)。コンセンサスマップとは、特定の問題などに関して組織成員が抱く共通した思考を束ねたものであると同時に、組織成員がどのような刺激に対して注意を払い、どのように処理し反応するかという、組織成員の思考や行動に影響を与える無意識のフィルターなのである。

(25) Festinger (1957) は、認知を、要素またはそれらの集合に分解し、次のような関係を導いた (pp. 260-261, 訳 p. 245)。

- ・ 一対の要素の間には、無関連、協和または不協和の関係が存在する。
- ・ 2つの認知が相互に関係がない場合には、それらは無関連な関係にある。
- ・ 2つの認知要素だけを単独に考えてみた時、1つの要素の逆の面が、他の要素から帰結されるとすれば、それらは不協和な関係にある。
- ・ 2つの認知要素だけを単独に考えてみた時、1つの要素が他の要素から帰結されるとすれば、それらは協和的な関係にある。

つまり、認知的不協和とは、ある認知要素と逆の認知要素との関係性を表したものである。

なる (p. 263, 訳 p. 248)。すなわち、脳内では、不協和が起これば、その不協和を低減させようとする働きが起こり、その強さは、現在起こっている不協和の大きさに比例するのである。つまり、新しい思考や信念などと既存のネットワークが重要であればあるほど、不協和のレベルは高くなるとともに、このレベルが高ければ高いほど、その不協和を解消しようとする力も強くなるのである。

このような不協和を低下させる方法は、3つある (Festinger 1957, p. 264, 訳 p. 248)。

- ・ 不協和関係に含まれる要素の1つまたはそれ以上を変える。
- ・ 既存の認知と協和的な新しい認知要素を加える。
- ・ 不協和関係に含まれている要素の重要性を減少させる。

まず、1つ目の方法は、新しい思考や信念などを既存のものに変えるか、あるいはその逆かによって不協和関係を解消しようとするものである。次に、2つ目の方法は、既存の思考や信念などのネットワークが、それらに合う情報のみを加えることによって不協和の大きさを低減させるものであり、最後の3つ目の方法は、新しい思考や信念などの情報の重要性を低下させて不協和を解消しようとするものである。これら3つの適用例として、例えば、選ばれた選択肢の魅力を増大させるか、選ばれなかった選択肢の魅力を減少させるか、またはその双方によって、不協和は低減されることになる (p. 264, 訳 p. 248)。

以上のことを踏まえて、Festinger (1957) は、2つの要素の間に存在しうる最大の不協和は、2つの要素のうち、より抵抗の少ない方の要素が変化に対して示す抵抗に等しいとし、不協和がこの大きさを越えると、抵抗の少ない方の認知要素は変化することから、不協和は低減することになると結論づけた (pp. 265-266, 訳 p. 250)。つまり、新しい思考や信念などと既存のそれらのネットワークのうち、認知の風土が変わることへの抵抗が既存のネットワークの方が大きければ、認知の風土は変わらず、新しい思考や信念などは既存のネットワ

ークに吸収されるか廃棄されることになり、その逆であれば、新しい思考や信念などによって、認知の風土は書き換えられ、既存のネットワークは新しい思考や信念などに沿うように変化し、適応することになる。

ただし、上記②でも述べたように、強力な思考や信念(のネットワーク)は、様々な状況の中で繰り返し強化されてきたからこそ、強い思考や信念(のネットワーク)となっているのであり、それを変更することは極めて難しいと考えられる。もし、変更されるような事態が起これば、ネットワーク自体を新しい思考や信念に変更するか、あるいは強い思考や信念の変更を要求する現実世界を拒否し、仮想世界へ引きこもるかしか自分自身を保つことができなくなるのである。つまり、洗脳のプロセスとは、その人を支えているような強力な思考や信念とは矛盾する思考や信念を認知の風土へ送り込み、ニューロン(群)間のネットワークの不整合性を導き出し、自然に、認知の風土が新しい思考や信念のネットワークに書き換えられるように仕向けるプロセスと考えることができる。もちろん、既存の認知の風土は強力で、書き換えることは非常に難しいので、IVの4.(3)で述べたように、小さな違和感をきっかけに、ホメオスタシス機能を用いて、仮想世界と脳の間に関係を高めたホメオスタシスのフィードバック関係を強く作り出し、仮想世界に神秘性を持たせることで脳に錯覚を起こさせ、変性意識状態を作り出し、認知の風土を書き換えることが必要になるのである。

VI 洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークの構築とそこでの会計情報のあり方と役割

本節では、上記Vでの検討を踏まえて、ホメオスタシスのフィードバック関係の視点から、洗脳によるエンパワーメントであるトップダウン型のエンパワーメント(見せかけのエンパワーメント)の仕組みを分析するためのフレームワークを構築していきたい。なぜなら、洗脳による(見せかけの)エンパワーメントが行われる目的や理由、仕組みを解明するためには、それを分析する枠

組みが必要だからである。そして、構築したフレームワークの中での会計情報のあり方と役割を考えていきたい。

以下では、まず、上記Vで検討した、苫米地（2000）の洗脳の4つのステップとホメオスタシスのフィードバック関係を用いた認知の風土の解体と再構築のプロセスをもとにして、洗脳によるエンパワーメントの仕組みを分析するためのフレームワークを構築していく。次に、このフレームワークの中での会計情報の意義や役割などを考察することにしたい。

1. 洗脳の視点からエンパワーメントを分析するためのフレームワーク

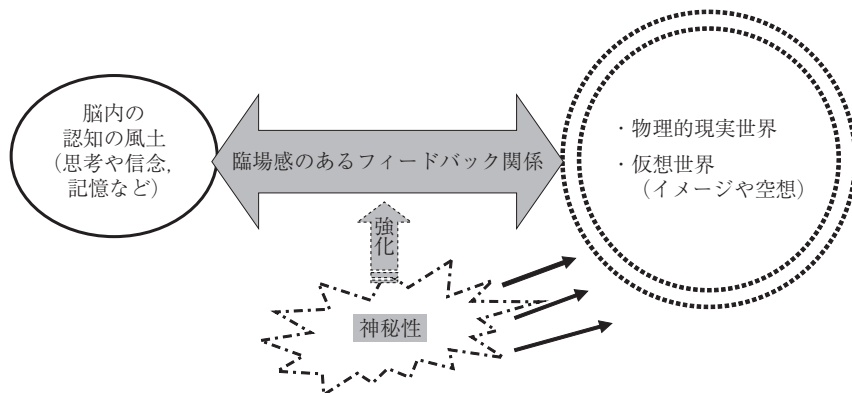
ここでは、洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを構築していく。そのために、まず、(1)では、上記Vで検討した結果を踏まえて、ホメオスタシスのフィードバック関係を活用した洗脳のメカニズムを図示し、整理していく。次に、(2)では、(1)で示した洗脳のメカニズムを用いて、洗脳による（見せかけの）エンパワーメントを分析するためのフレームワークを導き出していきたい。

(1) ホメオスタシスのフィードバック関係にもとづく洗脳のメカニズム

上記Vでの検討を踏まえて、本稿では、洗脳のメカニズムを次の図1のように表すことにする。

この図1を説明すると、左側の楕円の部分が、組織成員の脳内で、思考や信念、記憶（の記銘と想起）を形成しているニューロン（群）間の連結パターンの総和である「認知の風土」である。右側の二重点線円が、例えば、現実世界（物理的現実世界）や仮想世界などの脳を取り巻く環境を表している。そして、認知の風土と脳を取り巻く環境は、ホメオスタシスのフィードバック関係を結んでおり、例えば、現実世界ではなく、映画やTVドラマなどの仮想世界のことでも、現実に起こっていることと脳は錯覚を起こすという相互作用プロセスを表している。また、ホメオスタシスのフィードバック関係を強化するには、仮想世界での出来事に神秘性を持たせることで、体験している出来事の臨場感

(図1) ホメオスタシスのフィードバック関係を用いた洗脳のメカニズム



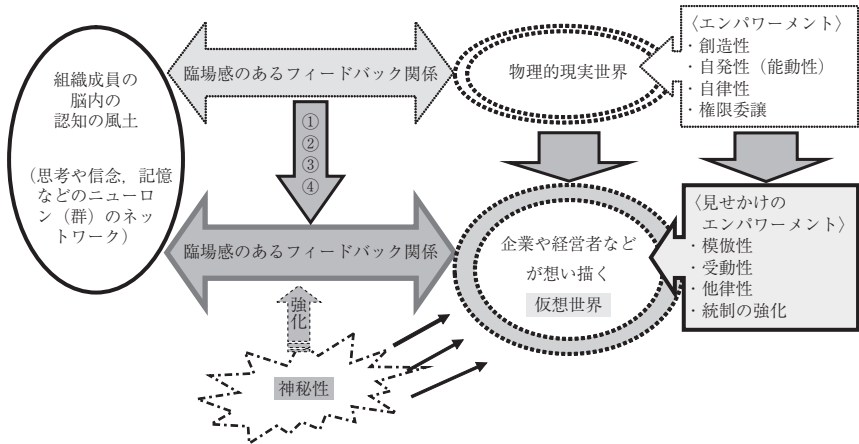
を増し、脳に完全なる錯覚を起こさせることが重要となる。

(2) 洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークの提示

上記の図1で示したホメオスタシスのフィードバック関係にもとづく洗脳のメカニズムを用いて、洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを示していく。

洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークは、次ページの図2のように表される。この図2を説明すると、まず、企業や経営者などは、自分たちが思い描く仮想世界を設定し、物理的現実世界と組織成員が結んでいるホメオスタシスのフィードバック関係を仮想世界と結ばせるために、上記(1)で説明した洗脳のメカニズムを用いて、下記の①から④の働きかけを組織成員に行う。この働きかけによって、仮想世界に神秘性を与え、臨場感を増すことで、組織成員の認知の風土と仮想世界のホメオスタシスのフィードバック関係を強化し、組織成員の認知の風土を新しいもの書き換えていくのである。この仕組みの中では、物理的現実世界で行われていた、権限を委譲し、創造性や自発性（能動性）、自律性を促進するためのエンパワーメントは、「権限委譲・創造性・自発性（能動性）・自律性」を促進するはずが、仮想世界では、

(図2) 洗脳による(見せかけの)エンパワメントを分析するための基本的なフレームワーク



物理的現実世界で行われていた通りに機能すればするほど、逆に、組織成員の「創造性・自発性(能動性)・自律性」を奪い、仮想世界が想定する理想像への模倣性を高め、組織や経営者などが描いた筋書き通りの組織成員を演じることで受動的になり、自分で自分を律しているつもりが、仮想世界のルールに縛られ、他律的になるというように、仮想世界と組織成員間のホメオスタシスのフィードバック関係を強化するためにエンパワメントは用いられるようになるのである。企業あるいは組織の外から見えるのは、組織成員と物理的現実世界なので、その関係の中では、組織成員の行動は、権限を委譲され、創造的に、自発的に、そして、自律的に、生き活きと行動しているように見えるのである。しかし、仮想世界とホメオスタシスのフィードバック関係を築いた組織成員は、物理的現実世界にいた時から見れば、明らかに、「統制され、創造性もなく、自発性や自律性を失っている」のだが、当の本人たちは、以前にも増して、権限を委譲され、創造性を求められ、自発的・自律的に行動していると錯覚しているのである。仮想世界の中では、組織成員は、企業にとって、そして、自分にとって価値ある行動を行っていると思いついでおり、それが評価さ

れ、自分の生きがいとなり、生き活きと働いていると錯覚しているのである。

したがって、洗脳による見せかけのエンパワーメントを分析するためには、洗脳のメカニズムを用いた下記の①から④までの働きかけが、組織成員に行われているか否かを分析することが重要になると考えられる。

①仮想世界の情報と脳内の認知の風土の間にホメオスタシスのフィードバック関係を結ぶ

認知の風土は、繰り返し強化されたニューロン（群）間の連結パターン
の総和であり、その殆どが単純・自動化されており、容易に書き換える
ことはできない。そこで、最初は、ほんの小さいことからでいいので、仮想
世界の情報を巧みに用いて、認知の風土に錯覚を起こさせることが必要と
なる。既存のニューロン（群）間のネットワークと相違する情報を送り込
んで、いきなり大きな違和感を引き起こすのではなく、それらのネットワ
ークが現実世界と結んでいるホメオスタシスのフィードバック関係を、現
実世界と類似する仮想世界の情報と結ばせることが重要となる。これによ
り、認知の風土の中の狙いを定めた特定の、あるいは主要なネットワー
クとのホメオスタシスのフィードバック関係を築き、他のネットワークに影
響を与えるための下地を作っていくのである。

②神秘性を用いた臨場感の増大とホメオスタシスのフィードバック関係の強化

仮想世界の出来事や情報に神秘性を持たせ、現実世界と同じかそれ以上
の「臨場感」を与えることによって、ホメオスタシスのフィードバック関
係を強化し、認知の風土の中の狙いを定めた特定の、あるいは主要なネッ
トワークとのホメオスタシスのフィードバック関係のパイプを太くする。
そうすることによって、脳は仮想世界との間で錯覚を起こし、いつでも組
織成員を変性意識状態へ導くことができるようになり、脳内の他のネット
ワークだけでなく、認知の風土全体へ影響を及ぼすことができるようにな

るのである。

③変性意識状態でアンカーを埋め込む

上記②までのプロセスで、認知の風土を形成する主要なニューロン(群)間のネットワークの一部とホメオスタシスのフィードバック関係を結んだ後、現在、脳内を支配する認知の風土の主要な思考や信念、記憶などを形成しているニューロン(群)間のネットワークとは異なる、洗脳者が望ましいと思える思考や信念、記憶の情報を仮想世界の中の出来事や情報として与える。その際、神秘性を持たせることによって、現実世界よりも圧倒的に現実に思えるような仕掛けを施すことが重要となる。そうすると、既にも上記②までのプロセスで、新しい認知の風土の味方となるニューロン(群)が増加していることから、既存の認知の風土の中の攻撃されたネットワークは、他のネットワークと整合性を保てなくなり、認知の風土に嵐が吹き、認知の風土内に混乱が生まれることになる。攻撃されたネットワークが主要であればあるほど、ネットワーク間の不一致を解消しようとするメカニズムから、新しい思考や信念、記憶を形成する情報に合わせて脳内のネットワークが再構築されることになり、いつの間にか、既存の認知の風土は書き換えられてしまうのである。この新しい思考や信念、記憶を形成するニューロン(群)間の連結パターンがアンカーとなり、脳内に埋め込まれることになるのである。

④トリガーに触れることでアンカーを作動させ、無限の洗脳ループを作る

上記③によって、脳内には新しい思考や信念、記憶を形成するニューロン(群)間の連結パターンがアンカーとして埋め込まれると同時に、そのアンカーには、いくつものトリガーが設置されることになる。すなわち、トリガーによって、新しいネットワークをいつでも直ぐに想起できるように、言い換えると、いつでも仮想世界の神秘的な出来事や情報を思い出し、再体験できるようにするのである。なぜなら、トリガーに触れると、

ホメオスタシスのフィードバック関係によって、新しいネットワークが活性化されるからであり、この繰り返しが認知の風土を強化していくのである。トリガーは、言葉や映像、匂いなど、どのようなものにも、そして、至る所に設置されることとなり、被洗脳者がそれに繰り返し触れることで、新しい認知の風土は強化されていくのである。つまり、ニューロン（群）間の連結パターンは、電気信号の強さや繰り返し使われることで強化され、単純化・自動化していくことから、ホメオスタシスのフィードバックを無限に繰り返す中で、新しい認知の風土は固定化されていくのである。

以上のように、洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークで示されている①から④までのプロセスを経て、認知の風土は書き換えられ、洗脳が深耕されていくのである。

以下では、このフレームワークの中で、会計情報はどのような意義を持つのか、また、その役割や機能は何かについて考察していくことにする。

2. 洗脳によるエンパワーメントの中での会計情報のあり方と役割

ここでは、上記1.の洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークの中で、どのように会計情報が使われ得るのか、また、どのような役割を果たし得るのかという検討を通して、このフレームワークの中での会計情報の意義を考察していきたい。

そもそも、会計情報は、企業の経営プロセスを会計という太陽で照らし出した影にあたるもの、すなわち、企業を会計で写像し、間接的に企業の行動を診断あるいは判断するためのものである。宮脇（2008）では、見える化によるエンパワーメントの促進を検討し、着色あるいは歪曲することなく、そのままの状態を写し出すことによって、企業の可視化が進み、改善などに結び付くと結論づけた。しかし、そこでの考察は、ボトムアップマネジメントを促進するためのエンパワーメントを想定していたものであった。本稿のようなトップダウ

ンコントロールのためにエンパワーメントを利用しようとする場合には、上述のようなノイズ（着色や歪曲）をできるだけ少なくして、そのままを写し出すという役割は求められていないであろう。なぜなら、洗脳によるエンパワーメントでは、まず、組織成員の認知の風土と「仮想」世界の間には、ホメオスタシスのフィードバック関係を結ばなければならないからである。つまり、現実世界ではなく仮想世界なので、会計情報はありのままの現実を写し出しておく必要はないのである。むしろ、企業や経営者、管理者にとって都合がよく、彼らの意図したように情報を写し出した方がよいのである。例えば、最近のテレビゲームが良くできすぎていて、ゲームに没頭するあまり、現実とゲームの世界が分からなくなり、ゲームの世界で人や敵を傷つけることが高得点になることと、現実の世界で人を傷つけることが区別できなくなることが起こっていることから、物理的現実世界にいる組織成員を支配するためには、彼らを仮想世界に住まわせ、仮想世界での評価システムに順応させることが必要であり、そのためには、仮想世界での組織成員の評価結果を、企業や経営者などの意図に沿うように写し出すことが重要となるのである。この段落の最初に述べたように、会計情報は企業活動を写し出したものであり、しかも1つの結果としての情報として表される。したがって、企業や経営者などが意図する仮想世界で活躍することによってのみ、結果としての、あるいはマイルストーンとしての会計情報が良くなるように仕組みられていたとすれば、もはや現実世界よりも仮想世界での活躍にやりがいを感じ、没頭するようになるかもしれないのである。

次に、企業が持つ数字の中でも、会計情報は、組織成員に最も「臨場感」を与えることができると考えられる。基本的に、組織成員の活動結果は、最終的には会計情報で表され、それが給料や賞与、昇進などに関わってくる。例えば、前述した仮想世界であるゲームの世界に没頭していることを考えた場合、主人公になりきってゲームを進めていくのだが、そこには必ず主人公のキャラクターの強さなどが数値で表されているのである。敵を倒せば、攻撃力や経験値などの数値が上がり、強い敵を超える数値に達しようとゲームの中で努力することが、ゲームをしているその人の努力とすり替わり、危ない場面を切り抜

ける度に、プレーヤー自身が生き延びているという臨場感が生まれることになる。つまり、会計システムが提供する会計情報は、仮想世界の中での「臨場感」を組織成員に与えることができるものなのである。

最後に、仮想世界の中で用いられる会計情報は、組織成員にとって、アンカーとなりトリガーとなり得るのである。例えば、仮想世界の中で組織成員が変性意識状態となった時、企業と経営者などが埋め込んだ目標という名の財務・非財務数値は、その数値に意味があるだけでなく、その数値に込められた「しなければならぬ行動」をも含んでいることに大きな意味があり、組織成員に埋め込まれることで、企業や経営者などが意図する行動を引き起こすためのアンカーとなり、トリガーとなるのである。例えば、〇〇部門で月に〇億円の利益目標があったとすると、その部門で働く組織成員は、見た目には自発性と自律性を促すエンパワーメントによって、自由に行動しているように見えるが、実は、それらの数字に込められた、経営者などが意図する行動を誘発されていると考えることができるのである。

以上のように、会計情報には、企業や経営者などが画策する仮想世界と組織成員の認知の風土をつなぐ役割があり、その点で、財務・非財務指標を含めた会計情報を提供する会計システムは、洗脳によるエンパワーメントの枠内では、洗脳によるエンパワーメントを目ろむ企業や経営者などの強力な武器となり得るのである。したがって、洗脳によるエンパワーメントの枠内では、会計情報は、いわゆる Johnson & Kaplan (1987) の言う、現場とかけ離れたという意味でのトップダウンリモートコントロールを促進するのではなく、まさに企業や経営者などの信念や意図に沿った行動を引き起こすという意味でのトップダウンリモートコントロールを可能にするという意味を持つのである。

Ⅶ おわりに

本稿では、まず、これまでボトムアップを推進するために用いられてきたエンパワーメントを、トップダウンコントロールに援用する可能性を検討した。概念的には混ざり合わないものであるが、エンパワーメントの中の企業や経営

者などが描き示す大きな方針やベクトルの部分に焦点を当てることで、トップダウンコントロールのためにエンパワーメントが利用できることを導き出した。次に、洗脳に関する主要な先行研究をレビューし、洗脳の定義の曖昧さや洗脳プロセスの解明が経験則に頼っており、洗脳のメカニズムの真の解明にまで至っていないことを明らかにし、最新の脳科学の視点から洗脳を捉えることで、洗脳を定義し、そのメカニズムの解明の糸口を提示した。そして、苦米地(2000)とTaylor(2004)の研究をもとにして、最新の脳科学の視点から、洗脳の目的、洗脳の方法や分類および洗脳時の脳の状態などの検討を行い、洗脳のメカニズムを究明してきた。最後に、ホメオスタシスのフィードバック関係を用いた洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを構築するとともに、そのフレームワーク内での会計情報の意義や役割などを考察した。

本稿の結論は次の2点に集約できる。

①洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを構築したこと

従来は全く考えられていなかった、トップダウンコントロールのためのエンパワーメントを導き出し、洗脳のメカニズムとホメオスタシスのフィードバック関係を用いて、トップダウンコントロールを強化する「洗脳によるエンパワーメント」を分析するためのフレームワークを構築した。これにより、エンパワーメントが見せかけであるかどうか、あるいは創造性や自発性、自律性を促進するはずのエンパワーメントが機能しない要因を解明できる可能性を大きく広げることができたと考えられる。また、トップダウンコントロールのためのエンパワーメントを明らかにすることで、創造性や自発性、自律性を組織成員から引き出すボトムアップエンパワーメントとの差あるいはギャップを明確に浮き彫りにすることができ、真のエンパワーメントの仕組みや機能を解明する手がかりを得ることができたと考えられる。

②演出装置としての会計情報の意義と役割を示したこと

洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワーク内では、これまでの定説であるトップダウンコントロールの手段としての会計情報、すなわち、Johnson & Kaplan (1987) が“*Relevance Lost*”で示した現場を殆ど反映しないリモートコントロール用の情報という意味での会計情報ではなく、仮想世界に臨場感を与える演出装置として、まさに企業や経営者などの信念や意図に沿った組織成員の行動を引き起こすという意味でのトップダウン（リモート）コントロールのための情報として、会計情報が重要な役割を担っていることを示した。また、Johnson (1992) が“*Relevance Regained*”で述べた、会計情報自体が現場のマネジメントには適さないという考え方に対しても、洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワーク内では、会計情報は、現場のマネジメントを強力に推し進める主要因として存在し得ると考えることができるのである。なぜなら、会計情報は、組織の中に仮想世界を作り出すために、あるいは認知の風土と仮想世界を結ぶために、もしくは仮想世界の臨場感を高めるために、トップダウンコントロールを推進する演出装置として、有力な手段となるからである。

以上のように、本稿では、最新の脳科学から洗脳を捉えることで、トップダウンコントロールのためのエンパワーメントのあり方や洗脳によるエンパワーメントを分析するためのフレームワークを構築し、エンパワーメントが促進しない要因を考えるための1つの検証道具を作り出してきた。また、洗脳によるエンパワーメントの枠組みの中での会計情報のあり方も検討してきた。次稿では、このフレームワークの整備を進めつつ、このフレームワークを用いて、エンパワーメントが促進していない、あるいは見せかけのエンパワーメントが行われているケースを検証し、理論的ではなく実際の企業の中で行われている、トップダウンコントロールのためのエンパワーメントの存在やその仕組みを、さらに深く考察していきたいと考えている。

私たちは、程度の差こそあれ、人に影響し、影響されて生きている。現代で

は、お互いの創造性や自発性（能動性）、自律性を伸ばしていくことができるような関係のあり方が、これまで以上に組織のマネジメントにも要求されているのではないだろうか。夢と希望に満ちた理念や枠組み、方向性などが確立した中で、創造性や自発性、自律性などが達成されるマネジメントのあり方は、実務でも理論でも追求しなければならない大きな、本当に大きな課題である。これからも、その糸口を会計という枠に囚われることなく、ポリバレント（polyvalent）な視点から考察し続けることが大切であると考えている。例えば、その糸口の1つとして、サッカーというチームスポーツで、現在、提唱されている戦術的ピリオダイゼーション理論がある。この理論は、チームとしてのプレーモデル（規律）が習慣化するほど、選手の創造力がより発揮されるという考え方であり、実践スタイルである（村松 2009, p. 104）。企業というチームでも、同じ理屈（道理）やスタイルがあてはまるのではないだろうか。こちらも、稿を改めて検討してみたいと思っている。

参 考 文 献

- Anthony, R. N., *The Management Control Function*, (Boston: Harvard Business School Press 1988).
- Cialdini, R. B., *Influence: Science and Practice (2nded)*, (Glenview: Scott, Foresman and Company 1988). (社会行動研究会訳, 『影響力の武器—なぜ、人は動かされるのか—』, 誠心書房, 初版, 1991年。)
- Festinger, L., *A Theory of Cognitive Dissonance*, (Stanford: Stanford University Press 1962). (末永俊郎監訳, 『認知的不協和の理論—社会心理学序説—』, 誠心書房, 初版, 1965年。)
- Harris, J. R., *The Nurture Assumption: Why Children Turn Out the Way They Do*, (New York: Free Press 1998). (石田理恵訳, 『子育ての大誤解』, 早川書房, 初版, 2000年。)
- Hassan, S., *Combatting CULT MIND CONTROL*, (Rochester: Park Street Press 1988). (浅見定雄訳, 『マインド・コントロールの恐怖』, 恒友出版株式会社, 初版, 1993年。)
- Hunter, E., “Red China’s Hate Week: how the Communists whip up feeling against America,” *The New Leader*, (September 30, 1950), pp. 6-7.
- , *Brain-Washing in Red China: the calculated destruction of men’s minds*, (New York: The Vanguard Press 1951). (福田実訳, 『洗脳—中共の心理戦争を解剖する—』, 法政大学出版社, 初版, 1953年。)

- , *Brainwashing: The Story of Men Who Defied it*, (New York: Farrar, Straus and Cudahy 1956).
- Johnson, H. T., *Relevance Regained: from top-down control to bottom-up empowerment*, (New York: The Free Press 1992). (辻厚生・河田信訳, 『米国製造業の復活—トップダウン・コントロールからボトムアップ・エンパワメントへ—』, 中央経済社, 初版, 1994年。)
- , & R. S. Kaplan, *Relevance Lost: The Rise and Fall of Management Accounting*, (Boston: Harvard Business School Press 1987). (鳥居宏史訳, 『レレバンス・ロスト』, 白桃書房, 初版, 1992年3月。)
- Lifton, R. J., *Thought Reform and the Psychology of Totalism: A STUDY OF "BRAINWASHING" IN CHINA*, (New York: W. W. Norton & Company 1961). (小野泰博訳, 『思想改造の心理』, 誠心書房, 初版, 1979年。)
- Schein, E. H. with I. Schneier & C. H. Barker, *Coercive Persuasion: A Socio-psychological Analysis of the "Brainwashing" of American Civilian Prisoners by the Chinese Communists*, (New York: W. W. Norton & Company 1961).
- Simons, R., "Control in an Age of Empowerment," *Harvard Business Review*, (March-April 1995), pp. 80-88. (宮下清訳, 「エンパワーメントを成功させる四つの方法」, 『DIAMOND ハーバード・ビジネス』, 1996年12-1月, 13-20ページ。)
- , *Performance Measurement & Control Systems for Implementing Strategy*, (Upper Saddle River: Prentice-Hall 2000).
- Taylor, K., *Brainwashing: The Science of Thought Control*, (Oxford: Oxford University Press 2004). (佐藤敬訳, 『洗脳の世界』, 西村書店, 初版, 2006年。)
- Zaltman, G., *How Customers Think: Essential Insights into the Mind of the Market*, (Boston: Harvard Business School Press 2003). (藤川佳則・阿久津聡訳, 『心脳マーケティング—顧客の無意識を解き明かす—』, ダイアモンド社, 初版, 2005年。)
- 岡田斗司夫, 『ほくたちの洗脳社会』, 朝日新聞社, 初版, 1995年。
- 小森陽一, 『心脳コントロール社会』, 筑摩書房, 初版, 2006年。
- 西田公昭, 『マインドコントロールとは何か』, 紀伊國屋書店, 初版, 1995年。
- 谷 武幸・宮脇秀貴, 「会計情報によるエンパワメント」, 『企業会計』, 第48巻第12号, 1996年12月, 128-33ページ。
- 苔米地英人, 『洗脳原論』, 春秋社, 初版, 2000年。
- , 『心の操縦術: 真実のリーダーとマインドオペレーション』, PHP研究所, 初版, 2007年。
- 富永裕久 (茂木健一郎監修), 『目からウロコの脳科学』, 初版, PHPエディターズ・グループ, 2006年。
- 宮脇秀貴, 「レリバンス回復における管理会計情報の役割—ABC/Mを中心として—」, 『神戸大学修士論文』, 1996年1月。

- , 「エンパワーメントと管理会計情報-TQM 的 ABC/M の観点から-」, 『六甲台論集』, 第 43 巻第 1 号, 1996 年 7 月, 135-55 ページ。
- , 「管理会計情報と TQM-フラット型チーム組織での活用を求めて-」, 『神戸大学第二論文』, 1997 年 1 月。
- , 「管理会計情報による TQM の活性化-エンパワーメント型の活用を求めて-」, 『香川大学経済論叢』, 第 71 巻第 2 号, 1998 年 9 月, 211-57 ページ。
- , 「ありふれた企業家物語」, 『香川大学経済論叢』, 第 73 巻第 2 号, 2000 年 9 月, 141-73 ページ。
- , 「エンパワーメント型管理会計の再考-エンパワーメント概念の拡張を求めて-」, 『香川大学経済論叢』, 第 76 巻第 2 号, 2003 年 7 月, 191-219 ページ。
- , 「エンパワーメントとコーチング-エンパワーメントのソフトな側面に焦点を当てて-」, 『香川大学経済学部研究年報』, 第 46 巻, 2007 年 3 月, 205-245 ページ。
- , 「「見える化」とエンパワーメント~コーチングとオフサイトミーティングによるコミュニケーションの見える化~」, 『香川大学経済学部研究年報』, 第 47 巻, 2008 年 3 月, 31-89 ページ。
- , 「内発的動機づけとエンパワーメント~自律性の支援の連鎖が生み出す組織の活性化~」, 『香川大学経済論叢』, 第 80 巻第 4 号, 2008 年 3 月, 57-110 ページ。
- , 「エンパワーメントと記憶の操作~コーチングを用いたコンセンサスマップの改変~」, 『香川大学経済論叢』, 第 48 巻, 2009 年 3 月, 171-241 ページ。
- 村松尚登, 「戦術的ピリオダイゼーション理論~サッカーの「本質」からとらえた, トレーニングの考え方~ (最終回:まとめとして)」, 『サッカークリニック』, ベースボール・マガジン社, 初版, 2009 年 9 月号, 100-104 ページ。